

乳幼児の仲間関係の発達を支える遊びの指導プログラム作成
に関する基礎的研究

(課題番号 17530470)

平成17年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C))
研究成果報告書

平成19年3月

研究代表者 丸山良平

(上越教育大学 学校教育学部)

はしがき

本報告書は、乳幼児の仲間関係の発達を支える遊びの指導プログラムを作成するための基礎的研究として、乳幼児の遊びと仲間関係の実態と保育者援助について研究したものである。乳幼児が保育園と幼稚園においてふだん行っている自発活動としての遊びの場面、保育者が援助する遊びの場面において18カ月間の参与観察により資料を収集した。

観察資料は乳幼児たちの活動や保育者の援助が一段落したところで区切って、クラスメートとの行為、会話、視線、表情によるかかわり、保育者による行為、会話、視線、表情を通じた援助、という視点で文章化して事例にまとめ考察した。この報告書は、その途中経過として、平成17年度の観察資料を分析した研究成果をまとめたものである。

なお、本研究を推進する過程で得られた成果は膨大であり、この報告書で表現できた内容は一部に過ぎない。すでにさらなる検討に着手しており、それらの内容については、稿を改めて報告していく予定である。

また、本研究を遂行しまとめるにあたり、多くの方々から多大なるご指導とご協力をいただきました。皆様に心から感謝申し上げます。

【研究組織】

研究代表者：丸山良平（上越教育大学 学校教育学部）

【研究経費】

平成17年度 500千円

平成18年度 500千円

計 1,000千円

【研究発表】

丸山良平 2007 保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態 上越教育大学

研究紀要 第26巻 331-343頁 上越教育大学

目 次

第1章	
乳幼児期における人間関係の心理学的検討	1
第2章	
乳幼児期における人間関係を支える保育者援助の検討	9
第3章	
保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態	29
第4章	
2歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態	42
第5章	
3歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態	73

第1章 乳幼児期における人間関係の心理学的検討

本章では、主に心理学系の文献をレビューして、乳幼児期の子どもが有する人間関係を形成する能力とその発達、ほぼ同じ年齢の子どもとのかかわり、仲間関係について検討する。さらに、集団保育場面における幼児の仲間関係と保育者の役割を検討する。

乳幼児期の人間関係

乳児の人間関係にかかわる能力

人は新生児期から養育者に微笑みかけるが、Wolff (1963) は、新生児の微笑をひきだすのは、人の声、特に女性の声が最も効果的な刺激という。養育者は乳児のこの笑顔を見たときに、自分に対して微笑んでいると解釈して、微笑み返したり、あやしたり、抱き上げたりと積極的な養育行動をするようになる。すなわち、この微笑が周囲の人とのかかわりを生み出す可能性を開いているのである。従って、人は生得的な社会性を備えて誕生するといえよう。

また Condon & Sander (1974) は、新生児が大人の話しかけに対して反応していることを明らかにし、それを相互作用の同期性とした。この同期性をひきだすのが人の音声だけであり、特に有意味語音に対する反応がよいことを示した。これも人が生得的に社会性を持っていることを示すものと考えられている。

一方、Bower (1977) は、乳児の社会性の指標として、微笑以上に模倣行動（共鳴動作）をあげている。乳児が養育者の口を開ける行為を見ると口を開けたり、養育者の舌を出す行為を見ると舌を出したりというような同じ動作、共鳴動作をすることに着目して、社会性を持っているとした。

人はこのような周囲の大人の話し声や表情に応答する能力をもって誕生し、この能力があるがゆえに、大人に反応を返して、結果的に社会的関係を結ぶことができるのである。

周囲にいる人への愛着

Bowlby の愛着理論によれば、乳児が泣く、微笑む、声を出すなどの行動は、養育者を乳児に接近させ、さらにそれを維持させる働きを持つという。そして乳児がしがみつく、吸い付く、後を追うなどの行動は、乳児から養育者に接近する行動としている。前者を信号行動、後者を接近行動と呼び、どちらも養育者とのかかわりを生むのに有効であるという。さらに乳児は這って移動できるようになると、養育者を安全基地として拠り所にする。身近な環境を探索し、不安になれば養育者のところに戻り、気持ちを立て直すのである。このように Bowlby の理論では、乳児はまず養育者という特定の一人の人物（多くの場合、母親）に愛着を形成し、それを土台として、家族や仲間へと愛着の対象を拡大していくと考えられている。

その一方、Lamb (1980) の報告によれば、母親が主な養育者となっている家庭におけ

る乳児は、両親のどちらにも同じように愛着を成立させていたし、愛着の対象として、特に母親を選択する傾向はなかったという。さらに Lewis (1987) は、乳児の人間関係が両親、きょうだい、祖父母、仲間などのさまざまな対象から生まれ、乳児の人間関係の広がり初めから多方向であるという。

これまでの検討によれば、子どもは生得的に、身近な他者とのかかわりを生むような能力を持っており、それによって積極的に能動的にかかわりを作り出していることが分かる。身近に年齢の近い子ども、いわゆる仲間がいれば、それとも同様にかかわりを作り、人間関係を成立させていくと推測される。そこで次に、乳幼児期の年齢の近い子ども（これ以降、同輩と呼ぶ）との人間関係を検討する。

乳幼児の同輩との人間関係

乳児の仲間関係について、金田・諏訪・荻野・田丸・中山・三隅・井坂 (1990) は 1970 年代以降の諸研究をレビューし、そこで指摘された点を次のように要約して示している。①乳児期でも他児との多様な関係が成立しうる。早くは 2, 3 か月で他児への注視、笑いかけなど、対人行動の初期発達にみられる行動が他児にも生じうる。また、1 歳頃になると複合的な行動（注視を伴う対他児行動、Mueller らによる SDB）により、比較的持続する相互交渉がみられるようになる。②対人関係の発達は、従来考えられてきたような母子関係を基盤としてその後の発達がなされるといった一元的モデルだけではなく、母子関係、仲間関係などの多様な対人関係の発達が同時並行的になされうるといった二元的あるいは多元的モデルの可能性が考えられる。そして、1 歳頃の発達を理解する場合、後者のモデルの方が蓋然性が高いと思われる。③ 0, 1 歳期の仲間関係の形成においては、媒介する事物の存在、事物の特性（大きさや可動性など）、これまでの接触経験（親しさ）、おとなの介在のしかたなどの諸条件が極めて大きな影響を与える。なおここでいう SDB とは、Socially Directed Behavior の略記である。

金田他の要約によれば、生後 2 か月頃の早期から同輩に働きかけているし、に仲間関係の形成には、物と養育者などの大人の介在が影響を与えている、といえる。

乳児の同輩とのかかわりにおける変容を、櫃田・浅野・大野 (1986) は次のように記述している。生後 3～4 ヶ月は、他児とは主として物に対する関心の共有という形で間接的に結びついていて、まだ相互の存在が刺激になりにくい段階である。5～9 ヶ月は、他児をみる行為が多くなる。姿勢が安定してきて注視の対象として他児の存在が重要な意味をもちはじめたためと思われる。6 ヶ月から他児への動作によるかかわりが増えはじめる。操作能力が育ち、それをを用いて相互に積極的な関心を向けあい、見るだけではなく動作的にもかかわりをもちだした段階である。10～12 ヶ月は、大人に対する行動が増える。養育者を安全基地として探索活動を開始する時期で、それにより他児へのかかわりが減少する段階である。

さらに乳幼児の物とのかかわりと仲間関係について、遠藤 (1988) は次のように報告している。1 歳前後になると物を介したかかわりが多くなり、物の取り合いをする。相手の乳児にではなく、その子が持っている物に興味を向け、それを取ったり、取り返したりする。その取り合いの中で相手への興味生まれる。1 歳後半になると物と相手への興味統合され、目的をもった交渉をするようになる。遠藤によれば、生後 7 ヶ月から既に同輩

に対して興味を示し、移動が可能になると積極的に接近してかかわりを持つようとするが、当初は物に対する興味が主となっている。それから次第に相手の子ども自身への興味が加わっていくようである。

この子ども同士の相互作用の発達について、Mueller & Lucas (1975) は3段階あるとした。第1段階は、1歳から2歳の子ども同士での物を仲立ちとしたかかわりで、物を媒介として互いを知る機会となるという。第2段階では物を中心とせずに、相手の行動に興味を向け、その行動に反応してかかわりを持つ。第3段階になると物を交代して使って遊ぶことが可能になり始める。その時期について、Mueller & Brenner (1977) は、1歳半を過ぎる頃から第2段階の行動が増加するようになるが、2歳以前には、第3段階の行動はほとんどみられないとしている。

また、Mueller & Rich (1976) は、1歳児において、同輩との仲間関係のある幼児とない幼児では、前者の方が後者よりも相互作用の質がより洗練され、高度なものになっているとしている。これは同輩の幼児とかかわる経験をしていれば、その相手となる幼児に関する情報を習得しており、それを基礎知識として、より上手く、よりリスクの少ないかかわりを持つようになることを示唆する。

さて初対面の3歳代の幼児同士が関係をつくり、一緒に遊びはじめるまでの過程を中野(1987) は、幼児は相互に相手の行為を模倣して遊びの文脈を作り出し、それを共有するようになるという、さらに模倣による行為は、虚構性を帯びやすく遊びを成立させやすいこと、相手の行為を模倣しなくても、相手を仲間と認め接近することで偶発的な仲間遊びが出現することが可能になっていると報告している。3歳期では相手の模倣や相手に接近するという同調行動が相互交渉のはじまりを促しているといえる。

これまでの検討により、同輩の子ども同士のかかわりでは、仲立ちとしての物の存在と同輩とのかかわった経験、相手の模倣や相手への接近という同調行動が大きな意味を持つことが分かる。

そこで次に、集団保育場面における乳幼児の仲間関係と保育者の役割について検討する。

集団保育場面における幼児の仲間関係と保育者の役割

子ども同士の相互作用

子どもたちはどのようにして相互作用のきっかけをつくるのであろうか。松井・無藤・門山(2001) は、仲間との相互作用のきっかけを「新たに仲間との相互作用を生みうる働きかけが行われること」と定義し、3歳クラスにおける同輩との相互作用の開始場面を捉え、その実態を次のように報告している。7月から12月までは相手を新しい活動へ誘うことが多い。相手の模倣が多く、相手との相互作用というより相手と同じことをしながら一緒にいる状態が多い。1月から3月までは、自分の活動へ相手を引き込む働きかけは少なく、相手の活動へ働きかけることが多い。相手の行動に対する関心の高まりと相手との活動の増加により、相手の活動内容を見きわめ、それに適した働きかけができるようになる。また、「入れて」と言っても承認されるとは限らず、相互作用のある状態に至ることは少なく、直接相手を誘う明示的な方略よりも、間接的なかかわりをもつ暗示的な方略の方が、相互

作用のある状態にいたる場合が多い。これに従えば、相手のことを知らない入園当初から8ヵ月まで程度は相手と少し距離をおき、観察したり平行遊びをしたり同調行動をしたりして、相手への関心と理解を持つようになって、仲間として一緒に遊ぶという交流が生まれる、といえよう。

保育園3歳クラス児、4歳クラス児の相互作用の手続きについて、岡野（1984）は次のように述べている。3歳クラス児はコンタクトを試みる時には模倣や動作による働きかけが多いが、4歳クラス児は言葉による働きかけが多い。さらに言葉による働きかけでコンタクトが成立するのは、対象児本人（自分）から他児に働きかける場合（発信）よりも、他児から自分が受ける場合（受信）の方が多く、受信する際の方が言葉の役割がより大きい。新入園児と在園児を比べると、発信の場合、新入園児は言葉による働きかけでコンタクトを成立させることが多く、在園児は、言葉以外の模倣や動作による働きかけでもコンタクトを成立させる。反対に受信の場合、新入園児は言葉以外の働きかけでもコンタクトを成立させるが、在園児は言葉によるもののみが多くなる。すなわち保育歴が長くなると他児からの働きかけの中で言葉のみが有効となり、それ以外の働きかけは敏感さを失い、コンタクト成立には至らなくなる。さらに言葉による働きかけの中で、より確実に受け入れられ反応を引き出すのは質問形である。また、3者以上の複合的なコンタクトの成立には発話が大きな役割を果たす。親密な特定の幼児がいる場合、2者は同性児であり、相手からの働きかけの中で発話による比率は平均より低く、加齢と共に相対的に機能の低下してくる模倣と動作による働きかけがここでは有効に機能する。親密な特定の幼児は変わることもあり、必ずしも固定して継続してはいないが、そうした特定児を持つ幼児は、特定児を持たない幼児より、多数の他児とのコンタクトを持つ傾向がある。集団の中では、特定児との関係は他児との関係づくりの核のような役割を果たすと考えられる。

岡野に従えば、3歳クラス期の働きかけでは相手の言葉や動作の模倣と相手への接近などといった動作が多いが、保育歴を重ねるに従い言葉が増加する。その言葉による働きかけは3者以上の関係成立に役立つといえる。親密な特定児を持つことは、より多くの幼児との関係を成立させるのを促すようである。さて幼児が同輩と親しくなるのは、多くの場合、一緒に遊ぶことによるであろう。そこで次に遊びへの仲間入りをみていく。

遊びへの仲間入り

5歳クラス児の仲間入りについて、倉持・柴坂（1999）は、クラスメートとの活動経験を重ねているので、遊びそのものよりも、遊んでいる幼児に引かれて仲間入りをする傾向が強く、反対に集団形成の初期では自分の興味のある遊びに引かれて仲間入りをする幼児が多いと述べている。幼児は相手との理解、親密性の高さによって、何をもちめて仲間入りを目指すのかに違いあることが分かる。また倉持・柴坂は、遊び集団側が仲間入りを目指す幼児を受け入れるか否かは、仲間入り児が最初に取り方略が影響しているという。仲間入りの意図が明確な、「入れて」などの言語を使用した場合の受け入れ率は高いが、反対に仲間入りの意図が不明確な、「周辺をうろうろする」「遊びの場に進入したりする」ようなやり方はトラブルに発展する場合が多いという。そして一緒に遊ぶ経験を積み重ねた時期では、「入れて」という言語的方略が主になることを示した。これはそれまでの経験から仲間入り児をに対してし、「あの子なら一緒に遊んでも楽しい」などという信頼を

持っているからであろう。もし遊び集団側が仲間入り児をふだんの行動から「一緒に遊びたくない子ども」と判断していたら、仲間入りを拒否することもあると推測される。

また、5歳クラス児が遊び集団の遊びへ仲間入りを果たす際に、遊びの組織化レベルによって、効果的なやり方が異なると青井(1991)いう。青井によれば、平行遊び・連合遊びという低い組織化レベルの遊びでは、それへの同調を明示する行動、ルールに従う、決まりの主張など直接的、積極的な仲間入りを働きかけるやり方が有効という。協同遊びという高い組織化レベルの遊びでは、観察、援助の申し出、補助的な役割など遊びの流れに直接的影響を及ぼさないやり方が有効という。その理由として、組織化レベルの低い遊びでは、一緒に遊んでいる共属感が遊び集団成立が主な基盤であり、遊びの持つ枠組もしくは遊びにおけるルールを認識する必要性が低いために、仲間入りが容易と考えている。組織化レベル高い遊びでの場合、遊びの外から遊びの流れ、遊びの持つ枠組、そして遊びにおけるルールを十分観察し、認識して徐々に仲間入りを進めていく必要があるからという。このように5歳クラス児ともなれば、遊びの展開と参加している子どもの様子を見て、それに応じた適切なやり方で対応するようになってきていることが分かる。

さて原・片岡・謝・祐宗(1994)によれば、4、5歳クラスにおいて、仲間入りに成功した幼児は、失敗した幼児に比べて、いきなり遊びに加わる行動が多いという。こうしたやり方をするのは仲間入りを目指す幼児の側が、相手との親密性が高ければこうしたリスクの高いやり方をしても拒否されることがないと予測に基づいて判断しているからと考えられている。幼児たちはお互いにそうした親密性の確信がなければ、このようなやり方をしないと見えよう。またやったとしても、多くの場合、拒否されたり、いざこざの発端となったりすると推測されよう。

幼児相互の親密性の高低によって仲間入りのやり方が異なることは青井(1992)も示している。遊び集団側と一緒に遊びたいと思う幼児には、遊びに参加し遊び続けるに必要な情報を与えるような働きかけを行うという。このように仲間入りの成否は、仲間入りの目指す幼児の行うやり方だけよるのではないのである。この親密性は園という集団の場において、お互いに一緒に遊ぶ楽しさを経験を積み重ね、相手を理解しているから高まるのであり、他者とのかかわりを経験してきた、これまでの成果ともいえよう。

同輩とのいざこざ

保育園2歳クラスにおける1年間のいざこざの変化を、朝生・斉藤・荻野(1991)が次のように報告している。いざこざの原因は、当事者の2人が共に特定の物を手にして使いたいという要求が衝突する「同一要求の対立」が主になっており、1年間を通して6～8割を占めている。それへの対処として、5月では奪われそうになったら、引っ張る、泣くという抵抗するやり方が多いものの、積極的に身体攻撃をしたり、物を持って逃げたり、「嫌だ」と叫ぶこともみられる。10月では、奪われそうなときに「ばか」と言葉で非難するようになる。また例えば、「貸して」と依頼したり、それに対して「(自分が)先に使っていたから(嫌だ)」, さらに「貸してくれないと遊んであげない」など言葉で交渉するようになる。3月では、ほとんどのいざこざ場面において、行動による抵抗が多くみられる。また先占の主張が多くの場合で認められるようになり、先に占有し使っているものが使用する権利があるというルールが幼児間で共有されはじめる。いざこざの終結では1

年間を通して保育者の介入がほぼ半数に達する。

2歳クラスでは物の奪い合いが主で、言葉による主張、抵抗はみられるものの、多くは行動による抵抗であるし、その終結にはふつう保育者援助が必要であることが分かった。

3歳クラスにおける1年間のいざこざの変化を斎藤・木下・朝生(1986)が次のように報告している。いざこざの原因は、不快な働きかけが6・7月で5割近くまであり、その後減少するものの3割前後と1年間を通して多い。また物・場所の専有は1年間を通して約3割と多い。イメージのずれは、6・7月は1割程度であるが、9・10月には2割強に増加し、1・2月もほぼ同程度である。いざこざの終結は、6・7月では原因行動に対する無視・無抵抗の態度を取っていざこざに至らない場合が3割強、1回の拒否で終了する単純な抵抗が2割弱であるが、それらは9・10月以降は半分程に減少する。相互理解は、6・7月で1割強であるが、9・10月で3割弱、1・2月で4割弱まで増加する。

3歳クラスでは、物と場所の取り合いだけでなく、相手を否定するような行動をして、いざこざが起こることが多くなる。さらに一緒に遊ぶようになるとイメージのずれを原因とするものが増加する。物の扱いやふりなどでイメージを共有できないことによる。言葉による相互理解が不十分だからであろう。いざこざの終結では相互理解が、集団保育の経験を重ねると平行して増加する。言葉による相互理解が十分とはいえないもの、それを使用する経験をして次第に相手に自分の意図、考えを伝えようとし、相手側も言葉によって理解するようになるといえよう。

さて幼児は言葉による自己主張をどのように捉えているのであろうか。脇谷(1989)の報告によると、他児が遊んでいてそれに入りたいたときは、「入れて」と主張するのが「良い子」と幼児は考えているという。また物を使って遊んでいるときに、他児が「代わって欲しい」と要求したときに「良い子」は「嫌だ」と主張すると考えるのは年少児に多く、年長児は「良い子」はそのような自己主張しないと考えるものが多いという。保育経験を積むに従い、譲る場面で自己主張をしない方が良いと考えるものが増えるのである。

クラスの幼児のかかわりを調整する保育者の対応

幼稚園に入園した直後からの3歳クラスにおける保育者の発話の特徴として、深田・原・山崎(1993)は次のように報告している。入園当初は幼児がなかなか自主的に物事に関われないので、保育者の方から幼児の気持ちを聞き出すような質問が多くみられるが、次第に物事と自主的にかかわるようになると幼児の関心を深めるために、幼児が接している事物に関する質問を積極的にするようになる。この報告によって、保育者は時期に応じて、同輩との相互作用を行いやすいように援助していることが分かる。

さて幼児は、遊び集団への仲間入りの際には「入れて」などと言葉で意思表示しているが、それは保育者から指導されたやり方で、よほどの理由がない限りは、仲間入りさせてやることを保育者は奨励するのが一般的である(例えば、倉持・柴坂・青井, 1998)。確かに、「入れて」といえば簡単に遊びに参加できる場合が多くみられる。しかしそれがいつも、遊び集団側の意図と合致するわけではなく、時には集団側が保育者からの無言の圧力を感じて形の上だけの仲間入りの承認という場合も少なくない。原・片岡・謝・祐宗(1994)が指摘するように、言葉による儀礼的な仲間入り方略を指導するだけでは不十分で、遊びに参加した後に、遊びの文脈に応じた役割取得ができるように促す指導が必要であろう。

幼児同士のいざごごに対する保育者の対応について、本郷・杉山・玉井（1991）は保育所の1～2歳児における物に関するいざごご場面に関して、次のように述べている。子どもが1歳前後の場合、制止が最も多く約1/4である。加齢と共に制止は減少し、要求・気持ちの確認という対応が増加する。解決策の提示は観察期間を通してほぼ一定であるが、内容は加齢と共に変化し、1歳前後は代替物を提示するものが9割と多いものの、すぐに減少し、順番の提案や別の遊びの提案が増加する。物を奪い合ういざごご場面では、保育者は制止するだけに止まらず、子どもの成長と応じて、要求を聞いたり、相手の意図や心情を説明したりして相互理解を促そうとしている。すなわち保育者は積極的に、子どもの相互理解を進めるような役割を担っているといえよう。

ここで検討してきたように、クラスメートを理解する、遊び集団へ仲間入りすることを促したり、いざごごを調整したりと幼児同士のかわりを調整する保育者の役割は重要なことが分かる。

それでは保育者は子ども同士が直接、相互作用することを促すような援助をしなければならぬかという点、そうではないようである。幼稚園5歳クラス児の社会的スキルの学習に関する研究では、直接的に仲間との遊びや関わりを持たなくても、一人遊びを充実させ、遊びの場を共有することにより友だちとの関わり方を学べることを示し、仲間との関わりを持たず一人遊びをする幼児には、少なくとも同じ様な興味を持つ者同士を同じ場所で遊ばせるだけでも、社会的スキルの学習という観点からは有効であるとしている（畠山・畠山・山崎,2003）。これに従えば、無理に一緒に遊ぶように誘導する必要はなく、一人でいる子どもが他児の遊んでいる活動内容や行動の様子を観察したり、平行遊びを始めることでも仲間関係が生まれるきっかけになるといえる。すなわち、一人遊びや平行遊びが多い0歳クラスを含む3歳未満クラスでも保育者の援助によって効果的に仲間関係を育むことができると推測できるのである。

文 献

- 青井倫子 1991 遊び場面における幼児の仲間入りのストラテジー 広島大学教育学部研究紀要第1部教育学 40 187-192
- 青井倫子 1992 遊び集団への仲間入り児の統合過程 広島大学教育学部研究紀要第1部教育学 41 191-199
- 朝生あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1991 いざごご場面における2～3歳児の方略 日本教育心理学会第33回総会発表論文集 93-94
- Bower, T.G.R. 1980 乳児期：可能性を生きる（岡本夏木・野村庄吾・岩田純一・伊藤典子，訳）ミネルヴァ書房（Bower, T.G.R. 1977 A primer of infant development. W.H. Freeman）
- Condon, W.S., & Sander, L.W. 1974 Synchrony demonstrated between movements of the neonate and adult speech. *Child Development*, 45, 456-462.
- 遠藤純代 1988 0歳後半期における子ども同士の交渉：道具の役割を中心として 保育学年報第26巻 pp.155-171 フレーベル館
- 深田昭三・原考成・山崎晃 1993 年少児の自由遊び場面における保育者の言語的援助 広島

- 大学教育学部研究紀要第1部心理学 1 195-201
- 原考成・片岡美菜子・謝文慧・祐宗省三 1994 幼児の仲間入りに関する研究：遊び集団の組織性と維持について 幼年教育研究年報 16 27-32
- 畠山美穂・畠山寛・山崎晃 2003 仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか？保育学研究 41(1) 20-28
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子 1991 子ども間のトラブルに対する保母の働きかけの効果 発達心理学研究 1(2) 107-115
- 櫃田紋子・浅野ひとみ・大野愛子 1986 乳幼児の社会性の発達に関する研究 日本教育心理学会第28回総会発表論文集 470-471
- 金田利子・諏訪きぬ・荻野美佐子・三隅輝見子・田丸尚美・中山昌樹・井坂政子 1990 集団保育における保育者と子どもの関係 金田利子・柴田幸一・諏訪きぬ(編), 母子関係と集団保育(34-175) 明治図書
- 倉持清美・柴坂寿子 1999 クラス集団における幼児間の認識と仲間入り行動 心理学研究 70(4) 301-309
- 倉持清美・柴坂寿子・青井倫子 1998 仲間入りにともなうリテュラルな表現 日本子ども社会学会第5回抄録集 42
- Lamb, M.E. 1986 2歳までのアタッチメント(愛着)の発達 F.A. Pedersen, (編) 父子関係の心理学(依田明, 監訳) 新曜社 (Lamb, M.E. 1980 The development of parent-infant attachment in the first two years of life. In F.A. Pedersen(Ed.) The father-infant relationship: Observational studies in the family setting. Praeger.)
- Lewis, M. 1987 Social development in infancy and early childhood. In J.D. Osofsky (Ed.) Handbook of infant development (2nd ed.), pp.419-492. Wiley.
- 松井愛奈・無藤隆・門山睦 2001 幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討
- Mueller, E., & Brenner, J. 1977 The growth of social interaction in a toddler playgroup: The role of peer experience. Child Development, 48, 854-861.
- Mueller, E., & Lucas, T. 1975 A developmental analysis of peer interaction among toddlers. In M. Lewis, & L.A. Rozenblum (Eds.) Friendship and peer relation. Wiley.
- Mueller, E., & Rich, A. 1976 Clustering and socially-directed behaviors in a playgroup of 1-year-old boys. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 17, 315-322.
- 中野茂 1987 初対面の幼児における遊びの出現過程の検討 日本教育心理学会第29回総会発表論文集 318-319
- 岡野雅子 1984 幼児期の相互交渉の形成について：保育園3歳児4歳児の場合 日本家政学会誌 35(4) 261-269
- 斎藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ 1986 仲間関係 無藤隆・内田伸子・斎藤こずゑ(編) 子ども時代を豊かに pp.59-111 学文社
- 脇谷順子 1989 子どもたちのSelf-Regulationの発達について 日本教育心理学会第31回総会発表論文集 154
- Wolff, P.H. 1963 Observation on the early development of smiling. In B.M. Foss (Ed.) Determinants of infant behavior, Vol.2, pp.113-133. Wiley.

第2章 乳幼児期における人間関係を支える保育者援助の検討

乳幼児が保育者や同輩の乳幼児と人間関係をつくったり、その関係を深めたりするのを保育者はどのような援助することが必要なのであろうか。本章では、主に保育所保育指針や保育者向けの保育指導書をレビューして、乳幼児の人間関係を支える保育者の援助について検討する。

保育所保育指針に示された乳幼児の人間関係と保育者援助

保育所保育指針に示された子どもの様子とそれに対して望まれる保育者のかかわりを発達過程区分に従ってまとめて概観してみる。

6か月未満児の特徴と期待される保育者のかかわり

生後3か月頃には、子どもは周囲の環境に興味を持ち見回すようになり、物音がしたり、大人の話し声がしたりするとそちらの方向をみる。あやすと笑うようになり、微笑みが社会的な意味を持ちはじめ。養育者の自分への対応や働きかけに対する快と不快の感情が分化してくる。

生後4か月になると子どもは生理的な快、不快を泣き方で表出するようになる。そして大人の顔を見つめ、笑いかけ、「あー」「うー」などと声に出すなど、次第に社会的、心理的な表出へと変化させる。身近な人の声を覚えたり、また音のする方向に首を向けたり、近づいてくるものをみたり、ゆっくり動くものを目で追うようになる。音のする方向へ向く、見つめる、追視する、喃語を発するなどの行動を活発にする。

保育者は、このような子どもの行動に気づき、感受性豊かに受け止め、優しく体と言葉で適切かつ積極的に働きかけたり応答したりする。それによって子どもは自分が行った行動の意味を理解するようになり、保育者との間で情緒的な絆を形成する。これは対人関係の第一歩であり、自分を受け入れ、人を愛し、信頼する力へと発展していく。

6か月から1歳3か月未満児の特徴と期待される保育者のかかわり

6か月を過ぎると、身近な人の顔が分かり、あやしてもらおうと非常に喜ぶようになり、言葉が分かるようになる。

7か月頃から、人見知りが激しくなる。他方では、見慣れた人にはその身振りをまねて「にぎにぎ」をしたり「はいはい」などをして積極的にかかわりを持とうとする。保育者は子どものこの気持ちを受け入れ応答する。それが情緒の安定にとって大切であるし、そうしたかかわりの中で喃語は変化に富み、ますます盛んになる。

9か月頃には、身近な大人との強い信頼関係に基づく情緒の安定を基盤にして、探索活動を活発にする。また情緒の表現、特に表情もはっきりしてきて、身近な人や欲しいものに興味を示し、自分から近づくようになる。簡単な言葉が理解できるようになり、自分の

意思や欲求を身振りなどで伝えようとするようになる。

1歳前後には喃語は会話らしい抑揚がつくようになり、次第にいくつかの身近な単語を話すようになる。

保育者は一人ひとりの欲求に応え、愛情をこめて、応答的に関わるようにする。家庭との連携を密にし、1日24時間を視野に入れた保育を心がけ、生活が安定するようになる。

1歳3か月から2歳未満児の特徴と期待される保育者のかかわり

子どもはこれまでの保育者との安心できる関係を基盤とし、目前の未知の世界の探索行動に心をそそられ、身近な人や身の回りにある物に自発的に働きかけていく。その過程で、生きていく上で必要な数多くの行動を身につけていく。例えば、身近な人の興味ある行動を模倣し、活動の中に取り入れるようになる。また大人の言うことが分かるようになり、呼びかけたり、拒否を表す片言を盛んに使うようになり、言葉で言い表せないことは、指さし、身振りなどで示そうとするなど、自分の思いを親しい大人に伝えたいという欲求が次第に高まる。そして、1歳後半には、「まんま、ほちい」などの二語文を話し始める。

ボールのやり取りのような物を仲立ちとした触れ合いや物の取り合いも激しくなり、また、あるものを他のもので見立てるようになる。このように、社会性や言語の発達によって欠かせない対人関係は深まり、象徴機能が発達してくる。外界への働きかけは、身近な人だけでなく物へも広がり、大人にとっては、いたずらが激しくなったと感じられることが多くなる。

保育者との豊かな交流は、友だちと一緒にいることへの喜びへとつながる。情緒の面では、子どもに対する愛情と大人に対する愛情とに違いが出てくるし、嫉妬心も見られるなど分化が行われる。この時期は、保育者に受け入れられることで、自発性、探索意欲が高まる。保育者は子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重する。自分の気持ちをうまく言葉で表現できないことや、思い通りにいかないことで、ときには大人が困るようなことをすることも発育、発達過程であると理解して対応する。

2歳児の特徴と期待される保育者のかかわり

子どもは日常生活に必要な言葉を分かるようになり、自分のしたいこと、して欲しいことを言葉で表出できるようになる。行動はより自由になり、行動範囲は広がり、他の子どもとの関わりを少しずつ求めるようになる。

子どもは日々の生活の中での新たな体験により、環境にあるものへの関心や探索意欲を高め、そこで発見したり、感動したりして喜びを得る。それを自分に共感してくれる保育者や友達に伝えようとし、一緒に体験したいと望むようになる。このような子どもの欲求を満たすことで、諸能力も高まっていき、自分自身が好ましく思え、自信を持つことができるようになる。大人の手を借りずに何でも意欲的にやろうとする。しかし、現実にはすべてが自分の思いどおりに受け入れられないし、自分でできるわけでもない。そこで、しばしば自分の欲求が妨げられることを経験する。こうした状況にうまく対応できずに、時にはかんしゃくを起こしたり、反抗したりと自己主張をする。

子どもは周りの人の行動に興味を示し、盛んに模倣する。象徴機能も観察力も増し、保育者と一緒に簡単なごっこ遊びができるようになる。

保育者は子どもが甘えたり、かんしゃくを起こすなど感情が揺れ動く時期であり、それを順調な育ちであると理解して、一人一人の気持ちを受け止め、さりげなく援助する。模倣やごっこ遊びの中で保育者が仲立ちすることにより、友達と一緒に遊ぶ楽しさを次第に体験できるようにする。

3歳児の特徴と期待される保育者のかかわり

子どもは独立した個人として行動しようとし、自我がよりはっきりしてくる。そして他児との関係が子どもの生活、特に遊びにとって重要なものとなってくる。他児との触れ合いの中で、少しずつ友達と分け合ったり、順番を守って遊んだりできるようになる。子ども自身は友達と遊んだつもりになっていても、実際にはまだ平行遊びが多い。しかし、この時期に仲間と一緒にいて、その行動を観察し模倣することの喜びを十分に味わうことは、社会性の発達を促し、より豊かな人間理解へとつながっていく大切な基礎固めになる。周囲の大人の行動など日常観察していることをごっこ遊びの中で再現し、これまでのごっこ遊びより組織的になり、持続時間が長くなる。

また簡単な話の筋が分かるようになり、話の先を予想したり、自分と同化して考えたりできるようになる。ルールを守り自分から積極的に取り組もうとしたり、進んで保育者の手伝いをしたりするようになり、人の役に立つことに誇りや喜びを抱くようになる。

子どもは自我がはっきりしてくるものの、それをうまく表現や行動に表すことができないところもあり、保育者は子ども一人一人の発達に注目しながら、優しく受け止める配慮を欠かしてはならない。

4歳児の特徴と期待される保育者のかかわり

子どもは心身の機能間の分化、統合が進み、全体としてまとまりを持つようになる。自我がしっかりと打ち立てられ、自他の区別がはっきりしてくる。他者から見られる自分に気づき、自意識が芽生えてきて、これまでのように無邪気に振る舞えない場面が生じる。また目的を立てて行動するようになるので、思い通りにいかないのではないかと不安を感じたり、辛い思いをするなど、葛藤を体験する。こうした心の動きを保育者が十分に察して、共感したり、励ましたりすることで、子どもは保育者がしたような方法で、他者の心情や立場を気遣う感受性を持つことができるようになる。こうして他者にも心があることを実感し、身近な人の気持ちが分かるようになり、情緒は一段と豊かになる。

子どもは身近な人や事物、現象に関心を向け探索して、その特性を知ると同時にそれらとの関わり方、遊び方を体得する。そうした中で、仲間といることの喜びや楽しさをお互いに感じるようになり、仲間とのつながりは強まるものの、他方で競争心が生まれけんかが多くなる。そして仲間の中では、不快なことに直面しても、少しずつ自分で自分の気持ちを抑えたり、我慢できるようになる。

子どもの心の成長は著しく、自然物への興味を通じた感受性の育ちに注目しながら、保育者は子どもの集団生活の展開に特に留意する必要がある。

5歳児の特徴と期待される保育者のかかわり

子どもの日常生活上での基本的な習慣はほとんど自立し、一人でできるようになる。運

動機能は伸び、運動を喜んで行う。内面的に一段と成長し、自分で考えて納得のいく理由で物事の判断ができる基礎が培われてくる。自分や他者を批判する力が芽生えてきて、「ずるい」「おかしい」などと不当と思うことを言葉で表現するようになる。手伝いなどは、はっきりと目的を持って行うことが多くなり、その結果にも考えが及ぶようになる。好きでないことでも、少しは我慢して行い、他者の役に立つことがうれしく、誇らしく感じられるようになる。

仲間の存在がより一層重要になる。一つの目的に向かい数人がまとまって活動するようになる。お互いが自分のやるべきことや、ルールを守ることの必要性を分かり、集団としての機能が発揮されるようになる。言葉で共通のイメージをもって遊ぶようになる。けんかが起きると自分たちで解決しようとするようになってくる。お互いに相手を許したり、認めたりする社会生活に必要な基本的な能力を身につけるようになり、仲間の中の一人としての自覚や自信がもてるようになる。

子どもは大人の生活にも目を向けることができるときであり、保育者は子どもの社会性がめざましく育つことに留意しながら、子どもの生活を援助していくことが大切である。

6歳児の特徴と期待される保育者のかかわり

子どもは、全身運動をよりなめらかにいき、心身ともに力に満ちあふれ、快活に跳び回るようになる。大人のいいつけに従うより、自分や仲間の意思を大切にし、それを通そうとするようになる。遊びでは、それぞれの役割分担が生まれ、集団として組織だった共同遊びが多くなり、長く続くようになる。少し難しくても自分たちで満足のいくまでやろうとし、参加者それぞれの発案や創意工夫を重ねて、遊びを発展させていくことがある。

言葉が達者になり、口げんかが多くなる。批判力は大人にも向けられる。年長の子どもらしく振る舞おうと努力し、人前で泣かないように我慢するようになるが、ときには保育者に甘えることもある。

子どもは思考力と認識力を豊かに身につけ、それを活かしてアイデアを盛り込んで活動を創意工夫するようになるので、保育者は素材や道具、遊具、玩具をはじめさまざまな環境の設定に留意する必要がある。

保育指導書にみる乳幼児の人とのかかわりの発達

0歳クラス期から2歳クラス期までの様子

川原（1997a）による指導書には次のように記述されている。

生後2か月では、人の顔が見えると、微笑みを見せる。あやされると顔を見て笑い手足をふる。大人の優しくあやす声には、すでに自分が習得している声を反復して反応する。母親の声が分かりはじめる。苦痛、空腹などによる泣き声の区別をはじめる。首がグラグラしていることが多い。

3か月では、顔のかたちを見て、自分から微笑み、四肢を動かす。あやされると声を出す。母音に声門音が結びついた発声をする。首が座り、四肢が相対的に独立して動く。左右、上下、180度の往復追視をする。

4 か月では、見慣れた大人の顔を見ただけで一人で微笑みかけをする。特定の大人に積極的に喃語を発する。顔見知りの子どもの顔を見ると喜ぶ。第三者に自分の方から微笑みかけ、発声することがある。声を出して笑うようになる。首が座り正面を向く。手をのばし、指を開く。

5 か月では、あやされると声を出してはしゃぐ。大人に抱かれるときにその顔をさわる。発声では音節の繰り返しをするようになる。物が指先に触れると見て、指を開いて取る。子どもが持っている物を大人が取ろうとすると、手を引き戻す。掌で体を支えて腹部まであげて正面を向き、顔を左右に動かす。

6 か月では、呼びかけるような発声をする。母親や親しい保育者が手をさしのべると喜んで自分から体を乗りだしてくる。体を揺さぶる遊びを喜ぶ。人見知りをはじめ。感情が分化し嫌悪や恐れ的情绪が見られる。発声では音節を連ね、強弱、高低をつけて喃語を話すようになる。小さい物に注意を向けていじる。大人が支えると足をつっぱり短時間立つ。寝返りをする。

7 か月では、要求があるときには声を出して大人の注意をひく。名前を呼ばれるとその方へ顔を向けて、笑顔を見せる。両手に持っているものを打ち合わす。発声では「あばあば」「あうあう」など母音、多音節の声を出すようになる。うつぶせから仰向けへの寝返りをする。一人で足を投げ出して座り、両手に玩具を持って遊ぶ。腹ばいで手足をばたばたさせ、体を回す。

8 か月では、よく抱いてくれる人を見ると自分から体を乗りだして抱いてもらいたがる。側にいた人がいなくなると泣く。「いないいないばー」をされると笑う。隣の部屋などから親しい子どもの声が聞こえるとその方向をみる。親しい大人と親しくない大人をはっきり区別する。禁止の言葉、褒め言葉が分かる。玩具を一方の手から他方の手へ持ち替える。身近にあるものをつかもうとする。帽子などを引っ張って取ろうとする。仰向けの位置から頭をあげて起き上がろうとする。

9 か月では、子どもの方から親しい大人に向かって声を出したり、体を乗り出したり働きかける。大人から「ちょうだい」といわれると、手に持ったものを渡す。見知らぬ人が声をかけると泣く。「だめ」と強く叱られると泣く。「いいこ」と褒められると、それが分かり喜ぶ。欲しいものがあると声を出して要求する。大人の声をも真似て発声する。大人の「ばいばい」「にぎにぎ」「いやいや」などの言葉の指示で、その動作をする。欲しいものや大人に見てほしいものがあると、手差し指さしをする。大人が指差したものを見ようとする。大人が「○○は？」と言葉で問うと、そのものを指さしする。親指と他の指を合わせて小さなものをつまみあげる。腹ばいで腕を使って前へ這う。つかまり立ちをはじめ。

10 か月では、大人のすることをしたがる。大人がやる「ちょちちょち」などの手あそびをまねて遊ぶ。自分の名前を理解し、呼ばれたらその方を見たり、声を出したり、手をあげて応えたりする。見慣れた玩具がなくなると気づく。人差し指と親指をたくみにピンセットのようにして小さいものをつまむ。紙やぶりをする。瓶のふたを開けたり閉めたりする。箱のものを出したり入れたりする。自分の力で起き上がってしっかり座る。腹ばいにすると、両手、両膝、両つま先を使って這う。つかまり立ちをする。つたい歩きをはじめ。

11か月では、玩具を人に渡そうと差し出したり、友達の持っているものを取りに行く。大人が「ママはどこ」と問うと、正確に指差しをする。子どもが偶然に発した音声を大人が意味づけると、次第に意味のある一語文を言うようになる。食物を見ると必ず「マンマ」など決まった音声でいう。親指と他の指が対向してものをつかむ。食事の一部をひとりで手づかみで食べる。立っている姿勢から座る。片手にもものを持って、両ひざと片手で高這いで移動する。片手を大人に持ってもらって立って歩く。座った姿勢から手をついて立ち上がろうとする。

12か月では、自分の思い通りにならないとだだをこねる。もののやり取りを喜ぶ。ものを渡しかけて手を引っ込め、相手の反応をみて笑う。コップの取っ手を持って飲む。小さなものを一つ一つ、つまんでは瓶の中に落とし入れる遊びを好む。スプーンを持って食べる。座りながら向きを変える。一人で床から直接立ち上がる。歩行が始まる。

1歳3か月では、大人の要求を理解し、「おいで」といわれると来たり、「ねんね」と指示されると寝ころんだりする。自分の名前を呼ばれると「あい」と返事をし、自分の頭をなげる。大人の提案や指示に対して「いや」と言葉を使って拒否するようになる。大人が「いけない」というと、かえってふざけたりする。簡単な作業（おしぼり配りなど）の手伝いをしたが、真似る。子どもから大人の側に来て甘え、「よしよし」となだめられると満足する。絵本の絵を手で叩いたり、動物の絵にほほを付けたりする。年上の子どもの中にまじっていると一人で機嫌良く遊ぶ。相手から触られた体の部分が正確に分かる。「まんま」「わんわん」「ぶーぶー」などと言葉で表現する。大人に「口は？」「鼻は？」など体の部分を言葉で問われると、そこを指で示す。排尿したのち、「しーしー」と言って知らせる。歩いたり立ち止まったりする。椅子によじ登る。下に落ちているものをかがみ込んで拾う。歩きながら玩具を引っ張る。コップからコップへ水などを移す。

1歳後半では、何かを見せようと大人の手を引っ張る。友達と手をつなぐようになる。子どもの後に付いて歩く。ごっこ遊びをする。他者に玩具や洋服を見せて得意になる。他の子どもが保育者の膝にあがると怒って押しのけたりする。大人に鉛筆を握らせて、「わんわん」「ぶーぶー」などと言葉で指示して絵を描くようにせがむ。2語文を言う。自分の欲求を言葉で表現する。簡単な質問に答える。「赤いのいや、黄色いの」など、「○○ではない；□□だ」と言う。5、6個の積み木を塔のように積む。クレパスやマーカーでぐるぐると丸を描く。後ろ向きに歩く。階段1段くらいから飛び降りる。

2歳前半では、積み木を2個あるいはそれ以上並べて列車を作る。6～8個の積み木を塔のように積む。色の3原色（赤、青、黄）の名称が分かり、正しく指し示すことができる。ものの大きい、小さい、長い、短いが分かる。3語文を話すようになる。名前を聞かれると姓と名を答える。「なに？」と質問が多くなる。ものを運んだり、片付けるのを手伝う。友達とけんかすると保育者に言い付けにくる。友達を名前と呼ぶ。自己主張し、ときには「いや」と反抗して我を通す。本のページを1枚ずつめくる。ドアの取っ手を回して開けたり、瓶のふたをねじって開閉する。ボタンのはめ外しをする。箸を持って食べる。ハサミやノリを使い始める。短い距離なら走る。両脚でその場跳びをする。片足で立とうとする。短時間ものにぶら下がる。

2歳後半では、ごっこ遊びでは役を演じる。友達の好き嫌いがはっきりしてくる。「こうしていい？」と保育者に許可を求めに来る。友達を「～しようか」と誘うようになる。

きれいなものを見ると、「きれいね」と喜んだり感動する。「私たち」という言葉を使って自分と他人を結びつける。順番を待つことを理解する。名前を呼ばれると「はい」と返事する。生活経験を身近な人に言葉で言う。簡単な伝言をする。3までの数唱をする。歌の歌詞を覚える。大人が見本を見せると積み木でトンネル、門の形を作る。丸、三角、四角などの名称が分かる。会話をする。電話ごっこで交互に対話をする。クレパスを3本指で持ち始める。円を真似て描き、描いたものの名称を言う。ノリを付けて貼り付ける。小さなボールを片手で投げる。折り紙で三角、四角を折る。簡単な衣服の表返しをする。連続両足跳びをする。50cm位の所から両足をそろえて跳び降りる。三輪車を乗り回す。片足で立ち、バランスを取る。平均台を一人で渡る。

3歳クラス期の様子

川原(1997b)による指導書では、人とのかかわりに関連する項目のまとめとして次のように記述されている。

自立と甘えについて、自分で何でもしようと頑張るが、甘えたい気持ちもあって葛藤する。反抗的な言動が多く、命令されることを嫌う。自立心が発達して保育者を頼りにしなくても遊べるようになる。挑戦欲が強くなり、好奇心が旺盛になる。自己をコントロールする力を身につけていく。保育者に認めてもらいたがる。

友達関係について、けんかを通してゆずり合いや、思いやり、自己抑制力などを身につける。積極的に友達を作ろうとする。気の合う、好きな友達ができるようになる。困っている友達がいると手伝おうとする。知っていることを友達同士で教えあったりできる。友達がけがをしたことなどを知らせたりできる。男児同士、女児同士で遊ぶようになる。友達に対する責任を果たそうとする。

4歳クラス期の様子

川原(1998)による指導書では、人とのかかわりに関連する項目のまとめとして次のように記述されている。

社会性とルールについて、他児に積極的に関心を示し、気の合う仲間ができて、グループの仲間との団結心が芽生える。集団生活の中でのルールが理解できるようになり、遊びの中でルール違反した友達をはっきり非難するようになる。自分も順番を守ったり譲ったり、律儀なほどルールをわきまえて生活する。イメージを共有し、協力しあって大規模な遊びを展開する。しかし言葉による交流が未熟なため、ときどきイメージが異なってトラブルを起こす。役割を意識して当番の責任を果たしたり、ごっこ遊びを盛り上げたりする。仲間として共同活動をする。相手の気持ちを考えながら自分の行動を決める。誇りや自制心を持って活動する。

情緒について、友達へのいたわりや思いやりの心が育ってくる。「自分も欲しいけれど、友達にゆずる」といった耐性が育つ。相手の立場や気持ちを考えながら、「～だけれども～するのだ」という判断や意見を内面にもった対応ができはじめ、自制心が強くなる。プライドの高い子どもは、自我を侵されたり、分かっていることを先に指摘されたりすると忍耐と感情の葛藤が激しくなり、時には激怒することがある。しかし、行動による暴力ではなく、「ばかやろう」などと言葉での表現である。はにかみや、何かに躊躇するなど屈

折した複雑な心理をみせるようになる。想像力が発達し、絵本やお話の世界を楽しむと共に、想像による恐怖を持つようになる。

遊びについて、グループでの遊びがさかんになり、円形ドッジボールやわらべうた遊びを楽しむ。友達と協力したり、けんかをしたり、遊びの意図を伝えあったり、人間関係をつくりつつ遊びを流動的に進めていく。

5歳クラス期の様子

川原（1999）による指導書では、人とのかかわりに関連する項目のまとめとして次のように記述されている。

情緒について、感情を自覚し、コントロールすることを覚える。相手の立場に立って共感を示し、共に悲しんだり、喜んだりする。他者や動植物に対する細やかな愛情を示すようになる。ユーモアが理解できるようになる。

社会性・仲間関係について、共通の目標を持って役割遊びができるようになる。友達の行動や立場の理解ができ、さらに他者から見た自分を意識化できるようになる。友達を評価し、自己価値観を持つ。友達同士のけんかは、自分たちで話し合い解決する。仲間の結束が強くなっていく。遊びを豊かに展開するのに必要なルールに気づき、ルールを作ったり、守ったりして遊ぶ。

保育指導書にみる遊びと人とのかかわりを支える保育者の援助

0歳クラス期の援助と留意点

川原（2000）による指導書における人とのかかわり、遊びに関する記述を整理すると次のようにまとめられる。

年間の援助の要点として、保育者は、やさしい笑顔で向かい合い、やさしい声で語りかけたり、一緒に体を動かして一緒に笑って遊んだりして、思い切り赤ちゃんに触れ合う。手遊びをするときは、赤ちゃんに向かい合って行う。

遊びでは、保育者は絵本やままごと道具と一緒に食べる真似などの見立て遊びをする。保育者が子どもに「はいこれどうぞ」、「これ持ってきて」、「これぼいしてね」等と言いながらものを渡したり、取ってもらったりする、やりとり遊びをする。保育者が「〇〇ちゃんて待てー」「つかまえた」と言いながら子どもを追ったり体にタッチしたりする追いかけ遊びをする。保育者が「〇〇ちゃんどこかな」「ばあ」と言いながら物陰に隠れた子どもを見つけ出すかくれんぼ遊びをする。保育者が、やさしい声でわらべ歌をうたったり、子どもの顔や手に触れたり、手に玩具を持たせたりする、あやし歌遊びをする。このように保育者とたっぷり触れ合い、よい関係ができてくると友達にも目を向けることができるようになる。友達とかかわり合って遊べるように言葉をかけるなど援助していく。

与える玩具は生後1か月から3か月では、木製のガラガラ、リングトリオ、モビール、オルゴールメリーなど、視覚と聴覚を通して小さな刺激が入ってくるものを選ぶ。4か月から6か月は手の感触で物を確かめる時期なので、押すと鳴る人形、タンバリン、起き上がりこぼし、丸スズ、ベルハーモニーなど、触れることによって、反応を返したり変化す

るものを選ぶ。7か月から11か月は玩具への働きかけが積極的になってくる時期なので、ひもを引っ張ると動く車や動物、大きなボール、カタカタなど、動作に合わせて動きのあるものを選ぶ。

次に1年間を見通してみる。

4月は、新しい環境への不安や緊張を持っている親子の気持ちを受容し、ゆったりとかかわり情緒の安定を図る。5月は、ふれあい遊びをしたり、外気浴をじたりしてゆったりと過ごし、保育者との愛着関係を築いていく。6月は、梅雨の晴れ間には戸外につれ出したり、動きのある玩具やふれあい遊びをしたりして、機嫌よく過ごせるようにする。7月は、水遊びでは個々の健康状態を十分に把握し、興味を示す子どもから水に慣れ親しめるようにする。8月は部屋やクラスを解放し、水遊びや沐浴を十分に楽しみながら、異年齢児や他児とのふれあう機会を持つ。

9月は、他児への関心が強まるので、保育者が仲立ちとなり、友達といっしょに遊ばせる。10月は、気候が良い時期なので、戸外遊びが十分に楽しめるようにする。11月は、自己主張する子どもがいるので、表情や動作から要求をくみ取ったり、言葉に置き換えたりして、要求を満たしていくようにする。爽やかな日は戸外で全身を使った遊びを存分に楽しめるようにする。12月は、子どもからの語りかけが盛んになってきたら、伝えたいことをしっかり受け止め、コミュニケーションが取れた満足感を味わわせる。子どもの全身運動が活発になってきたら、室内で変化のある遊びを工夫する。

1月は、休暇中の不規則な生活や過剰な刺激で情緒不安定な子どももいるので、個々の状態を受け止め、調整して情緒の安定を図る。物への執着やひとり遊びが出てくる。その一方、他児への関心が起こりトラブルにもなるので、個々の要求を見極めてかかわるようにする。2月は、歩けることがうれしい時期なので、温かく戸外でも全身を動かして遊ぶ機会を多く持つようにする。他児に関心を持ち共に遊ぶようになるが、トラブルも多くなるので、それぞれの要求を見抜き、個々の気持ちを満たすように橋渡しをする。3月は、言葉のまねっこや保育者との言葉のやりとりを楽しもうとする時期なので、気持ちやさしくさなどを受け止めて発語の意欲を育てていく。

1歳クラス期の援助と留意点

荒井(2000a)による指導書にある人とかかわり、遊びに関する記述を整理すると次のようにまとめられる。

年間の援助の要点として、保育者との安定した関係の中で自分のしてもらいたいことや気持ちをだせるようにする。歩行が上手になってくるので、危なくないようにして、いろいろな活動を広げていくようにする。生活の中で見たり触れたりする事柄に言葉を添えて、相手になるようにする。外遊びや手先の遊びなど、自分のしたい遊びが十分にできるようにする。

次に1年間を見通してみる。

4月は、砂場で型抜きしたり、ボールを転がし追ったりするときは、保育者が相手になって遊ぶと喜び、楽しく過ごす。2、3人をベビーカーに乗せて、小動物を見たりしながら散歩をする。やさしい手遊びや唱え言葉のある伝統的な手遊びには興味を持つので、繰り返し歌い遊ぶ。好きな玩具や絵本は子どもが取り出せる位置に置く。お座りや這う子ど

ものの目の高さからでも見える場所に鏡を取り付け、鏡で遊べるコーナーを設ける。5月は、大勢での遊びや行動にはトラブルが起こりやすいので、なるべく少人数で過ごせるように工夫する。子ども同士が仲良く遊び、保育者ともゆったりと過ごせるように、園庭に日陰を作る。そこに、ござやテーブル、椅子を用意し、水分補給したりおやつを食べたり、絵本を読んだりできるようにする。砂場にはヨシズやパラソルを用意する。同じ仕草や、同じ言葉の繰り返しを喜ぶので、保育者は満足するまで相手をする。大ききの違うボールやカラフルなボールを転がしたり、追いかけてたりする遊びを援助する。おんぶや抱っこのできる人形とおぶいひもを用意し遊べるようにする。6月は、雨の日でも遊べるように居心地のよい空間を工夫する。例えば、仕切って狭い空間を作りったり、段ボールや牛乳パックで小さな家を作ったりして、子ども達だけが入れる場所や落ち着いて過ごせる場所を提供する。少人数のグループでゆっくりと遊べるように、玩具をあちらこちらに置く。手押し車や乗り物の玩具を押ししたり引いたりして自由に動いて遊べるようにする。大きい紙にクレヨンを使って、数人でなぐり描きをする。好きな動物や乗り物などの絵本は、何回でも繰り返し子どもの気が済むまで読む。簡単な歌に合わせて、楽器の遊びをみんなでそろってやる。タライや小さなプールでの水遊びでは、水の感触を楽しむようにする。

7月は、水遊びの好きな子や嫌いな子とさまざまなので、無理強いせず、その子のかかわり方を尊重する。盆踊りの曲や太鼓の音に敏感に反応し、リズムにのり喜ぶので年上の子と一緒にやるようにする。手袋人形や指人形を使って、手遊びしたり、歌に合わせて動かしてみせる。保育者のひざの上で絵本を見たり、歌をうたったりする。8月は、物の出し入れに興味を持つ時期なので中身の見える開けやすい引き出しに1種類ずつ玩具を収納する。「おつかいごっこ」ができるように、手提げ袋、リュックサック、買い物かごなど、出し入れや持ち運びが楽しめるものをいろいろと用意する。簡単な型はめ、玉刺しなどの手先を使う玩具を用意する。わらべ歌やメロディーに合わせて、体を動かしたり、手をつないだりし、さらに年上の子とも一緒に遊ぶようにする。土や小麦粉粘土などの感触を楽しみ、こねたり丸めたりする。涼しい夕方には、ベビーカーに乗せたり、2～3人で手をつないだりして散歩に行く。9月は、斜面や台のマットなどを使い、跳んだり、よじ登ったり、転がったりして体を動かして遊べるようにする。砂場では小石や木の葉、木の実などを使って見立てる遊びを促す。年上の子どものする運動会ごっこを真似て、「よーいどん」とかけ声をかけて競走したり、ダンスしたりするのを促す。いろいろな高さの異なる安全な台を用意し、そこを登ったり飛び降りたりするのを促す。秋の虫を探しながら園の周辺を散歩する。大きな紙いっぱいみんなでクレヨンなどでなぐり描きする。さまざまな紙とクレヨンを用意し自由に描けるコーナーを作る。

10月は、友達と一緒に走ったり追いかけてたりすることを促す。木の葉や木の実を皿や食べ物に見立てて遊ぶように促す。エプロン、着物、ドレスなどをごっこ遊びコーナーに用意し、自由に遊べるようにする。気に入った絵本を絵本棚に取り出しやすいように配置すると同時に、保育者は絵本を繰り返し読み聞かせる。11月は、安全な道を選んで友達と手をつなぎ、子どものペースで散歩を楽しむ。木の実でマラカスを作り、簡単な曲や歌に合わせてリズムにのって遊べるようにする。年上の子どもの達のごっこ遊びに、2～3人ずつで仲間入りして一緒に遊ぶようにする。CD やピアノのリズムに合わせて体を動かして遊ぶようにする。ひも通しやパズル、粘土などの手先を使う遊びを促す。2人く

らいで楽しめる狭いスペースを用意し、2人がけのベンチやテーブル、ソファーや長座布団が使えるようにする。大好きな絵本の動物や人物などのお面を用意して遊べるようにする。12月は、お面や尻尾をつけて友達や保育者と追いかけてっこやオニごっこをして体を温める。保育者が相手になりボールを転がしたり、投げたりして遊ぶ。人形、おぶいひも、エプロン、スカーフなどを用意し、ごっこ遊びを促す。指人形や手袋人形で繰り返しのあるストーリーを話を視聴させる。クリスマスソングやリズムカルな歌に合わせて鈴やタンバリンを鳴らして遊ぶのを促す。室内にいくつかのコーナーを作り落ち着いて遊べるようにする。

1月は、年上の子ども達がしているタコ揚げやコマ回しを見たり、一緒に仲間に入れてもらうようにする。軽快なメロディーに合わせて走ったり踊ったりするなど、体を動かして遊ぶことを促す。子どもがクレヨンで描いた紙で、お出かけバッグや帽子を作ってあげて、遊びが楽しくなるようにする。5～6人が一緒に楽しめるように、大型の手作りカルタや絵合わせを作り遊ぶのを促す。2月は、短時間でも戸外に出て、体を十分に動かす遊びをする。巧技台を登ったりくぐったりできるように並べておき遊びがおもしろくなるようにする。3輪車のコースを作り、2～3台連ねて遊べるようにする。オニのお面を付けて、オニごっこや的当て遊びをするのを促す。ブランコや滑り台は友達と交代して使うことを遊びながら指導する。数人で遊べるように押入や段ボール箱を上手に工夫してスペースを作る。友達と一緒に手をつないで散歩に出かける。3月は、ボールを投げたり、片足で蹴ったりできるように保育者は十分に相手になって遊ぶ。思い切り落書きができるように、大型のボードや紙を用意し、それぞれの子どもが思い思いに描けるようにする。ひな祭りやお別れ会などで昼食を共にしながら年上の子どもと交流を持つ。年上の子どもと一緒に散歩に行き、いつもと違う発見をできるようにする。

2歳クラス期の援助と留意点

荒井(2000b)による指導書にある人とのかかわり、遊びに関する記述を整理すると次のようにまとめられる。

年間の援助の要点として、保育者との信頼関係の中で、自分の気持ちを会話の中で表現できるようにしていく。戸外で体を使った遊びを楽しむようにする。友達と一緒に好きな遊びをする。歌をうたったり、リズムに合わせて体を動かすことを楽しむ。

次に1年間を見通してみる。

4月は、少人数で園の周りを散歩したり、園庭の花を見たり、虫を探したりする。段ボールにきれいな紙や布を貼り、ひもでつなぐ。物を入れて押したり、電車ごっこをしたりできるようにする。戸外で追いかけてっこをしたり、ボールを蹴るなど全身を使って遊ぶことを促す。人形をおんぶしたり、ままごとしたりして遊べるようにする。保育者の周囲に集まって絵本を読んでもらったり、手遊びを一緒にしながら友達と遊ぶ楽しさを経験する。玩具は同じ物を欲しがるのである子どもがいるので、必要な個数を用意する。また出し入れしやすい場所に収納できるようにし、その場所を絵で表示する。

5月は、好きな遊びができるようにコーナーを作り、人形やぬいぐるみ、ままごと道具などを用意する。散歩では年上の子どもに手をないでもらう。絵本やパズル、ままごと道具を出し入れしやすい場所に置き、自分たちでやれるようにする。子どもからの絵本のリ

クエストにはできるだけ応え、少人数グループでの読み聞かせをする。追いかけてっこやしっぽ取りなど、全身を使った遊びをする。天気の良い日はどろんこ遊びをする。指人形やペープサートなど、子どもが喜ぶものを使って人形劇をする。砂を湿らせて型抜きができるように、バケツ、容器、シャベル、ふるいなどの玩具を数多く用意する。

6月は、広い場所に巧技台を使って、段差や斜面、トンネルなどを作り、室内でも全身を使って遊べるようにする。好天のときは日陰でおやつを食べたり、遊んだりできるように、園庭にビーチパラソルを広げておく。水遊びや泥遊びができるようにし、バケツやジョウロ、空き容器を十分用意しておく。絵本では繰り返しや追跡があるストーリーを喜ぶので、お面や衣装を用意して簡単なストーリーの劇遊びをする。飼育している小動物を観察したり触ったりする。音楽に合わせて小動物になって表現する。新聞紙などで服や帽子を作ったり、破ったり、丸めたりして遊べるようにする。

7月は、園庭に日除けをして日陰を作り、おやつを食べたり、ごっこ遊びをする。色水を作り、柄杓やカップで出し入れして遊ぶ。水や泥で全身を使って遊んだり、ひも通しやパズルなどで静かに遊んだりする。年上の子どもを模倣しながら、一緒に盆踊りを楽しむ。スチレン皿やペットボトルなど水に浮く器を使って水遊び用の玩具を作る。フィンガーペイントやスライムで遊び、その感触を楽しむ。

8月は、水の中で座ったり、歩いたりボールを追いかけてたりして水遊びを十分に楽しむ。絵の具で大きな筆や手指を使って大胆に塗りたくる活動を楽しむ。年上の子どものダンスやゲームに入れてもらい一緒に遊ぶ。絵本や紙芝居に出てくるキャラクターなどの手袋人形を用意しておき、それを使って遊べるようにする。動植物などのいろいろな形や色のカードを多数用意しておき、少人数で色当てや形集めをして遊べるようにする。子どもが読んでと依頼する絵本はできるだけ読み、想像の世界を広げるのを支える。

9月は、部屋の隅に敷物を敷き、テーブルや椅子を置いて、友達と一緒にいることを楽しめるようにする。子ども達が自由に遊べるように巧技台を組み合わせておいたり、自由に踊れるようにリボンやポンポンなどダンスに使うものを用意しておく。年上の子ども達が踊るリズムカルなダンスと一緒に踊るように促す。笛の合図で友達と競走したり、立ったり座ったりして全身を動かして遊ぶようにする。「あぶくたった」など簡単なルールの遊びを取り入れていく。ペープサートやパネルシアターなどは楽しめるようにストーリーが短く、易しいものを選んで見せるようにする。ごっこ遊び用のドレスなどの衣装はマジックテープや大きめのボタンをつけて子ども達だけで身につけられるようにする。

10月は、部屋の中や廊下などに手作りの電話を置き、友達とのおしゃべりを楽しめるようにする。食事の雰囲気を変え、楽しくなるように、テーブルの位置やメンバーを変えてみる。フラフープ、かご、楽器などを用意して子ども達がくぐる、ジャンプして叩く、投げ入れるなど様々な動きをして遊ぶのを促す。年上の子ども達がやる玉入れや綱引きを真似てできるように工夫する。散歩で拾ったドングリや松ぼっくりなどで玩具を作ったり飾ったりする。メロディーに合わせて太鼓や鈴、タンバリンなどの楽器を弾いて遊ぶ。

11月は、ごっこ遊びをしやすいようにカーペットや座布団を敷いて暖かくしておく。ペープサートや指人形を用意しておき、それを使って保育者の真似をして演じたり、絵本の会話を真似したりするように促す。喜んで友達と一緒に体操したり、ごっこ遊びをしたりできるようにする。年上の子ども達のするごっこ遊びに参加して、必要な会話を経験で

きょうにする。目標を持って園庭を走れるようにボールおいたり白線でコースを描いておく。人形を使ったごっこ遊びができるように、服を着替えて遊べる人形を用意する。興味に応じて玩具を取り替えられるように、収納場所を絵やマークで表示する。

12月には、子ども達が戸外で自由におしゃべりをしたり、遊んだりできるように日だまりに椅子やテーブルを置く。子どもたちが積極的に絵本を見られるように、出し入れがし易い本棚を用意する。目標に向かって走ったり、ボールを蹴ったり、思い切り体を動かして遊べるようにする。皆でオニごっこをして遊べるように、保育者と数人の子どもがオニになり、追いかけたり追いかけられたりする。楽器を弾きながら、歌をうたったり、曲にあわせて踊る。日だまりで伝承的なわらべ歌に合わせて手遊びをする。カルタはどの子どもも取れるように同じ絵のカードを数枚ずつ作っておく。お面や帽子を使って遊べるように、子どもと保育者が一緒になって遊びに必要なものを作るようにする。

1月は、コマで楽しく遊べるように、回しやすい様々な形のコマを用意する。少し多めの人数での遊びを楽しむために椅子取りゲームや「子どもの王様」などを取り入れる。簡単な劇遊びができるようにペープサートを用意しておく。ごっこ遊びを楽しむために、鍋、急須、ヤカン、食器などの本物の生活用品、道具類を準備する。カルタ、タコ揚げ、コマ回しなどの正月遊びをできるようにする。体を十分動かすために追いかけてっこやしっぽ取りなど、走る遊びを多く取り入れる。

2月は、いろいろな役になって遊べるようにエプロン、白衣、帽子などの様々な衣装を用意しておく。部屋でも活動的な遊びができるように平均台や巧技台を工夫して組み合わせしておく。「大きなかぶ」「赤ずきん」などの簡単な劇遊びをする。ストーリーを作ったり、友達とおしゃべりしたりしてごっこ遊びを促すように、積み木で遊ぶときには木製の動物や人、車なども一緒に使えるようにする。劇遊びの中で、歌をうたったり、リズムに合わせて踊ったり、遊びの中にリズムカルなものを取り入れる。粘土やハサミを使ったり、パズルをしたり、遊びに集中できるようにする。長縄跳びはおもしろくするために、縄を動かして跳んだり、手をつないでかけ抜けたりする。

3月は、マットや巧技台で山や橋のように設定しておいて、劇遊びがし易い環境を作る。ごっこ遊びのコーナーに人形用のベッドなどを置いておく。集団でのルールある遊びのルールが理解できるように、保育者は一緒に遊びながら繰り返し教え、遊びを支え、楽しむようにする。年上の子どもと「春を探す」散歩に行く。年上の子どもの保育室へ行って遊んだり、玩具を借りてきたりして新奇な経験を持てるようにする。段ボールで作った電車でごっこ遊びをする。そのときに遊びが広がるように切符やハサミを用意する。皆で春が来たことを喜び、園庭やベランダで歌をうたったり、おやつを食べる。

3歳クラス期の援助と留意点

神長・待井・今井・日高（2000）による指導書にある人とのかかわり、遊びに関する記述を整理すると次のようにまとめられる。

年間の援助の要点として、家庭的な雰囲気にし、家庭にあるような玩具を置いたり、遊びかけの状態にしておく。保育者や友達と遊んでいる様子を見せ、遊びに関心を持つように誘いかけたり仲立ちをする。ごっこ遊びが発展したり、より楽しめるように材料や遊具の準備や配置に気をつける。また保育者も仲間になったり、遊びの提案をしたりする。

次に1年間を見通してみる。

4月は、遊びのコーナーや一人遊びができる場を設け、個々の遊びを十分楽しめるようにする。絵本や紙芝居は、繰り返しのあるストーリーや子どもの生活に関するものにする。保育者や友達と歌をうたったり、動きをつけて親しみが持てるようにする。

5月は、登園時に個々の子どもに声をかけたり、手をつないだりして安心感を持たせる。好きな遊びを見つけれない子どもには、保育者が声をかけて一緒に遊び、遊ぶ楽しさを味わえるようにする。子どもの話をよく聞いて、内容を感じ取り、話したいという気持ちを満たすようにする。楽しい食事ができるように雰囲気づくりをする。

6月は、晴れ間には必ず戸外へ出て、体を動かす遊びを十分に楽しむようにする。雨のときは、室内で運動的な遊びをして発散できるように工夫する。いざごごには、保育者が仲立ちとなり互いの気持ちを伝え、そのつど必要な言葉を知らせていく。イメージが膨らむような衣装や小物を準備し、保育者も仲間に入ってごっこ遊びの楽しさを味わえるようにする。

7月は、保育者や友達、年上の子どもの遊びに関心を示したら、誘いかけたり仲間入りの仲立ちをしたりする。いざごごの場面では、様子を見ながら相互の気持ちを受け止める。プールでは水位を低くしたり、玩具を用意して安心して遊べるようにする。保育者も仲間になって遊びながら、必要な言葉を使ったり自分の思いを伝えられるように援助する。いろいろな素材を使って、描いたり作ったりできるように準備する。

8月は、室内では好きな遊びができるように、戸外では水遊びやプール遊びが十分にできるように遊具や用具を準備し、いつでも使えるようにしておく。同年齢児や異年齢児と一緒に遊ぶとき、保育者は子どもの話をよく聞いて共感をもって受け止め、お互いに親しみが育つようにする。異年齢児との遊びに入れられない子どもには、友達の遊んでいる様子を一緒に見たり、保育者が仲間入りの仲立ちをして無理なく遊びに入れるようにする。

9月は、保育者も積極的に遊びに参加し、皆で一緒に遊ぶ楽しさや、体を十分に動かして遊ぶ気持ちよさを感じ取れるようにする。ミニサーキットコースやトランポリンなどを用意し運動が十分に楽しめるようにする。異年齢児とかかわる中で、真似てやりたいと思う機会を作る。保育者や友達と話す機会を多く持ち、よく聞いたり自分の思うことを話したりして楽しむようにする。ごっこ遊びの用具は取り出しやすい場所に置き、必要に応じて場を設定する。

10月は、保育者も一緒に遊びながら、ルールを守って遊ぶ楽しさを伝える。いろいろな運動が楽しめるように必要な用具を身近に出しておく。年上の子どもとのかかわりが深まるように、一緒に遊んだり、園外保育で手をつないで歩いたりする機会を設ける。子ども同士の様子を見守ったり、仲立ちをしたりしてかかわりが深まるようにする。いろいろな表現を楽しめるように、さまざまな素材や用具を準備する。

11月は、異年齢児と一緒に遊ぶおもしろさやかかわり方に気づくように、保育者が仲立ちとなって遊びに参加する。子ども達が遊びやすいように環境を工夫する。人気のある遊具や素材は個数を多く準備しておく。子どもが考えたアイデアを、保育者が仲立ちして他児に伝えるようにする。

12月は、クラスの友達と活動を共にする楽しさが感じられるように、一緒に絵本や紙芝居を見たり、歌をうたったり楽器を演奏したりする機会をつくる。子どもから遊びに誘

われたら、保育者は積極的に仲間になり、子ども達が人とかかわる楽しさを味わえるようにする。寒くても戸外で全身を動かして遊べるように、オニごっこやかけっこ、ボール蹴りなどを促す。

1月は、カルタや福笑いなどを子どもが自由に使えるように置き、保育者も参加して、子どもの状況に応じてルールを作る助言をしたり、楽しい雰囲気づくりをする。天気の良い日は戸外に誘って、全身を使って遊ぶ心地よさを共感し合えるようにする。友達との話を通して、共通した経験に気づかせて、子ども同士の会話が広がるようにする。コマ、タニ、福笑いなど、いろいろな物を作って遊べるように、材料や用具を分類して、子どもの取り出しやすい所に置く。

2月は、寒い中でも体を動かすことの心地よさが感じられるような遊びを促し、保育者も一緒に活動する。よく知っている絵本や紙芝居などの言葉や、日常生活でよく使われている言葉を用いて友達との簡単な会話が楽しめるようにする。制作に必要な用具と、いろいろなイメージがわくような様々な形や大きさの素材を準備する。ごっこ遊びの中で好きなものになって、イメージを表現する姿を認め、自信を持てるようにする。

3月は、4、5歳クラス児に親しみと信頼の気持ちが持てるように、保育者が仲立ちとなって互いの気持ちをつなぐようなかかわりを持てるようにする。子どもが自分でできたといううれしい気持ちに共感し、次の意欲を育てるようにする。お別れ会などでは、異年齢の仲間と親しんでかかわれるような場の設定、やり方を工夫する。

4歳クラス期の援助と留意点

神長・安澤・高村・小山（2000）による指導書にある人とのかかわり、遊びに関する記述を整理すると次のようにまとめられる。

年間の援助の要点として、園の生活経験の違いからくる遊び方や主張の仕方を受け止め、各自が戸惑わないように配慮し、安心感を持たせる。保育者が媒介となり、友達との接し方、遊びへの参加の仕方が分かるように援助する。遊びの中で保育者は各自の気持ちを言葉で表現するなどして仲介役を果たす。友達とのかかわりの中で、個々のアイデアを互いに認め合うように保育者は促し、各自が自己発揮できるようにする。

次に1年間を見通してみる。

4月は、登園を笑顔で迎え、明るい気持ちで生活できるように配慮し、子ども達が安全に安心して過ごせるように心がける。子どもの興味に応じて遊びを提供したり、遊具、玩具の個数を調節する。不安そうな子どもには話しかけたり手をつないだりして、一緒に行動し心の安定を図り、その子の要求を察知する。生活調査票などで好きな遊びや家庭での遊びを把握し、部屋に遊びのコーナー作ったり、遊びだせるように玩具を広げておく。

5月は、やりたい遊びが十分にでき、満足感を味わえるように場所や物、十分な時間を確保する。友達と同じ物を作る楽しさが味わえるように、作りたい物がすぐ作れるように制作コーナーを設けたり、部屋の隅に十分な材料を用意し、様子を見て提示したり、一緒に作ったりする。オニごっこやリズム遊びなどをクラス全体で行って、保育者や友達とのかかわり、簡単なリズムに合わせて動く遊びのおもしろさを感じられるようにする。

6月は、友達と同じ物を持つのを楽しむと同時に自分らしさを出そうとする工夫を促すようにする。ごっこ遊びで自分のなりたいものになって楽しめるように見立てたり、組み

合わせたり、作ったりして遊べる素材や玩具、場所を準備しておく。友達とのいざこざでは、それぞれの気持ちを十分に受け止め、相手の気持ちを代弁し、互いの思いを知らせるようにする。

7月は、思い切り水を使って遊べる場とゆったりと落ち着いて遊べる場を作り、それぞれの遊びが十分に楽しめるようにする。各自の水への抵抗感を配慮して、プールがクラスメートと一緒に楽しく遊べる場になるように工夫する。いざこざが起きたとき、双方の気持ちを受け止め、自分で気持ちを立て直せるようにしたり、気分転換ができるようにする。友達と一緒にいたり、遊んだりすると楽しいという雰囲気を作る。

8月は、ふだん仲間でない友達や異年齢の子ども同士のかかわりが増えるので、保育者同士の連絡を密にすると共に、制作コーナーなど遊びだせる場を設ける。友達同士のかかわりの中で、手助けしたり、それを相手が喜んでいたりすることを伝え、他者に認めてもらえる喜びを感じられるようにする。子ども達の話をしっかり聞き、経験したことを伝えたいという気持ちを受け止める。

9月は、楽しい会話とその時間を大切に、遊びのきっかけをつかむようにする。ごっこ遊びで客や売り手になって交替して遊んだり、遊びのヒントを提供して遊びを広げるようにする。子ども同士のつながりを仲介しながら運動する心地よさを味わえるようにする。遊具や用具は取り出しやすい定位置に整理しておき、すぐ遊びだして楽しめるようにする。棚に絵やマークを付けて、子ども達も整理しやすいようにする。いざこざでは、それぞれの気持ちを受け止め、見守ったり仲裁に入ったりして互いの気持ちが分かり合えるようにする。地域のお年寄りや子どもたちの祖父母を招待し、ふれあう場を工夫する。

10月は、一緒に走ったり踊ったりして、体を動かすことの楽しさを感じられるようにする。年上の子どもや友達のしている遊びに興味を持ち、かかわり合って遊ぶ場を持つようにする。いざこざのときには、双方の気持ちを十分に受け止め、保育者は橋渡しをして相手の思いが伝わるようにする。友達とルールを守って遊ぶ楽しさに気づかせていく。思わず体が動くような曲を準備したり、組み合わせで遊びが楽しめるような遊具や用具を工夫したりする。

11月は、やりたい遊びに入っていけるような雰囲気づくりをする。保育者も一緒に楽しみながら、満足するまで遊べるようにする。同じ物を持つことで連帯感を味わえるので製作を手伝ったり、材料をそろえたりする。年上の子どもがしている遊びを見たり、入れてもらったりして、遊びのおもしろさを感じたり、人とかかわって遊ぶ楽しさを体験できるようにする。ルールの理解程度の違いや誤解によるいざこざでは、子どもの気持ちをうけとめながら一緒に考える機会にする。

12月は、遊びの中で自分の考えを伝えるだけでなく、相手の気持ちや違う考えに気づくよう保育者が橋渡しをしていく。保育者が積極的に戸外に出たり、体を動かす遊びを工夫したりして、室内にこもりがちにならないように気をつける。お楽しみ会やもちつきなど、大勢で取り組む行事の楽しさを体験できるようにする。

1月は、カルタ、トランプ、コマ、すごろくなどを用意したり、自分で作れるようなタコやコマの材料を用意する。地域の人や保護者との交流を楽しみ、正月遊びを経験する。子どもが努力し工夫したことを保育者が認め、友達同士で応援し合う雰囲気をつくる。円形ドッジボールや高オニ、しっぽ取りオニなどを保育者も仲間に入って遊び、その楽しさ

を伝える。ルールを理解し確認する機会をつくる。遊びに必要な物や場を工夫して作れるように、いろいろな素材を分類して用意する。いざこざでは、解決を急がずに思いを伝えられるように仲立ちしていく。自分の思いを言葉で話したり、相手の話をきいたりできるように援助し、伝わった喜びや受け止めてもらった喜びを味わえるようにする。

2月は、子どもがしているごっこ遊びに、大好きなお話のエピソードを加えたり、イメージを展開しやすい場づくりをしたりして、変化や拡がり生まれるような工夫をする。遊びがうまく進展しないときは、保育者は仲間として参加し、その役でヒントを与えたり環境の再構成を行う。読み聞かせした絵本は子ども達が自由に触られるようにしておく。戸外で体を十分動かし、体が温まる心地よさを体験させる。各自の気づきや疑問を大切にし、友達と調べたり一緒に考えたりすることを繰り返すようにする。

3月は、ドッジボールや縄跳び、しっぽ取りなど皆でやれる遊びの用具や遊具は、取り出しやすい場所に置く。子ども達だけでも遊びが進められるようになるまで保育者は積極的にその遊びに加わり、楽しさを伝えるようにする。皆の遊びに入れない子どもには、ルールを教えたり、仲間入りの仕方を教えたりなどと個に応じて援助する。いざこざでは、どちらが悪いとの判断を下すのではなく、互いの話を聞き、気持ちの疎通を図るような仲立ちをする。年長クラスの担任と連携を取りながら、子ども同士の交流を深め、年長児へのあこがれや進級への期待を持てるようにする。

5歳クラス期の援助と留意点

神長・田中・吉永（2000）による指導書にある人とのかかわり、遊びに関する記述を整理すると次のようにまとめられる。

年間の援助の要点として、個々の心の動きや活動を見守り、安定して生活できるよう子どもとの接触を持つ。集団行動やグループ遊びなどの機会を多く持ち、その中で自分の力が十分に発揮できるような援助をする。子ども達で相談したり、活動を発展させたりできるように、十分な時間と場所を確保する。生活の中で得た感動を伝え合い、共感し合う場を持つようにする。クラス全体やグループで意欲を持って取り組んだり、子ども達で遊びを計画したり、発展させたりする場を用意する。年下の子ども達と触れ合う機会をつくり、園生活を楽しめるようにする。

次に1年間を見通してみる。

4月は、生活や遊びの場が自分たちのものとなっているように、子ども達と相談しながら環境を構成し、生活の仕方を考えていく。遊びの実態と子どもの希望によって、新しい遊具や用具を提供し、挑戦する意欲を満たすようにする。いざこざでは、相手の気持ちに気づくような言葉かけなど、子ども達で解決方法を考えられるような援助をする。年下の子ども達と一緒に遊び、親しみの気持ちを持てるようにする。友達と一緒に砂や土、水などを使って遊ぶように材料や用具を整理して置き、遊びの場や時間を確保する。

5月は、遊びの様子を見ながら、さらに盛り上がるようにアイデアを出したり、話し合いの内容を紹介したりする。遊びの用具や遊具は出し入れしやすい所に整理して置き、不要な物は子ども達と相談して片付ける。いざこざでは、それぞれの話を落ち着いて聞き、必要に応じて仲立ちする。春の自然の中でのびのびと体を動かす心地よさを味わえるようにする。

6月は、子ども達が遊び方を考えたり、必要な物を準備したりして、遊びを仲間とやり遂げた満足感を味わえるようにする。個人や小グループでの遊びが継続できるように部屋の環境を子ども達と考え、再構成する。いざこざでは子ども達で解決ができるよう見守る。

7月は、プールで好きな遊びができるようにボールやフープ、滑り台などの遊具や用具を準備する。プール活動が嫌い子どもには、プールサイドで遊べるようなバケツやジョウロを用意し、水に親しめるようにする。砂、水、土などの感触を楽しみ遊びが発展するように、さまざまな素材や用具を用意する。製作では各自のイメージに合った物を選択できるように材料を豊富に用意する。

8月は、子ども達と一緒に遊んだり、助言したり、励ましたりしながら、目的をもって遊べるようにすると同時に、ルールを守る大切さに気づくようにする。遊びに必要な物を考え、友達や年下の子どもとかかわって遊びが発展できるようにする。自分の経験したことや感じたこと、考えたことを相手に伝えたり、友達の話を聞いて共通のイメージを持って遊んだり生活したりするのを促す。各自の得意なところを認め、年長児としての自信や自覚を持ち、生きる力を育つようにする。

9月は、各自が力一杯取り組んでいる姿を認めて、さらに挑戦しようとする意欲を高め、達成したときの成就感を味わえるようにする。各自の意見や発想を大切に、友達と協力して遊びを進められるように見守る。子ども達が互いに認め合ったり励まし合ったりしていく姿を認め、友達とのつながりを深める。いざこざでは、互いの考えを十分にだせるようにし、解決方法を一緒に模索していく。

10月は、いろいろな運動に取り組み、自信や意欲が持てるようにし、さらに友達のがんばっている様子を伝え、互いに認め合えるようにする。友達と共通のイメージを持って遊べるように必要な素材や用具を準備したり、子ども達と一緒に探したりする。子ども達は自分が感じたり考えたりしたことを話し合い、工夫して作ったり遊んだりできるようにする。いざこざでは、子ども同士で自分の思いを伝え合えるように仲立ちをし、子ども達と一緒にルールを考えたり作ったりする。

11月は、仲間意識が深まるように、保育者はより遊びが楽しくなる方法を問い、遊び方やルールを一緒に考えていく。助け合い、励まし合い、協力する中で各自の良さを認め、満足感と自信を持たせるようにする。各自の考えや思いを友達に伝えたり、相談したりするように援助する。グループでアイデアを出して造形できるように材料や用具を用意する。体を十分に動かして、友達と遊ぶ楽しさを味わえるように、保育者は遊びに誘ったり、遊具の配置を工夫したりする。

12月は、友達と考えを出し合い、子ども達で遊びを計画して進められるように見守り、困ったときは保育者は一緒に考え、アドバイスする。グループでルールを考えて遊べるように必要な場所や用具を整えておく。いつでも自由に描画したり造形したりできるように、材料や用具を整理して置く。年下の子ども達と一緒に遊ぶ中で、役割を分担したり、相手の良さを認め合ったりして思いやりの気持ちを持てるようにする。

1月は、子ども達で友達との遊びを進め発展できるように、必要な用具や材料を準備する。子どもがしたい遊びをできるように励ましたり、やり方を教えたりして、やり遂げた満足感を味わえるようにする。できなくて悔しい思いをしている子どもには繰り返し取り組めるように励ます。各家庭で体験したゲームや遊びを用意し、いろいろな遊びに親しめる

ようにする。年下の子ども達と交流して遊べるように、遊びのコーナーを作る。年下の子どもに教えたり新しいルールを考えているときには励ましの声をかける。

2月は、各自の考えを大切に受け止め、それを他の子どもへ伝え、クラス全体に広めるようにする。各自が持っている力を十分に発揮できるように、励ましの言葉をかける。戸外遊びが十分楽しめるように遊具や用具を整備しておく。遊びに必要な小道具や背景を作ることができるように、いろいろな材料を用意しておく。

3月は、遊びの中で互い良さを認めて遊びが進められるように見守ったり、言葉かけをしたりする。友達と一緒に経験してきた遊びを思う存分楽しめるように、十分な時間と場を確保する。年下の子ども達に生活や遊びを伝えていく機会を多く取り、親しみを持って交流できるようにする。園生活を振り返り、お世話になった人々に感謝の気持ちを持つように言葉かけをする。

まとめと考察

0歳クラス期では、子どもがかかわる対象はほとんどが保育者である。こうした中で保育者を信頼し、コミュニケーションを交わし、情緒的なつながりを深めていき、人と交流し、コミュニケーションを取る基盤を形成するのである。保育者とのかかわりが、結果的に人とのかかわりの指導になっているといえる。

1歳クラス期では、保育者や年上の子どもの行動に興味を持ち、模倣したがるし、同年齢の子どもの中に好きな子どもができてはじめる。かかわる対象が保育者ばかりではなく、同年齢と年上の子どもに広がりだすのである。しかし、一緒に遊ぶことはほとんどなく、遊べたとしても長続きしない。それは自分の興味が先行し、相手のことを考えることがまだできないからである。それでもこの時期に他の子どもの様子を観察し、かかわりを持つようとするのは、他児とのかかわりの仕方、コミュニケーションの取り方を知る大切な経験になっている。保育者とのかかわり、他児とのかかわりを保育者が援助することが結果的に指導になっているといえよう。

2歳クラス期では、同年齢の子ども2、3人と一緒に好きな遊びをある程度できるようになる。その反面、物の取り合いを頻繁にするようになり、いざこざが増えてくる。こうした経験をして、必然的に相手の要求、気持ちを察して、ときには自分が譲らなければ、うまく楽しく遊べないことに気づくのである。これは保育者に言葉で説明されただけで分かるのではなく、経験して知っていくしかないのである。人とのかかわり、コミュニケーションの取り方を保育者が意識的に指導を始めるのは、この期といえよう。保育者とのかかわり、他児とのかかわりの調整、コミュニケーションの取り方を保育者が援助することを通して、保育者は主に指導しているといえよう。

3歳クラス期では、進んで大人の手伝いをするなど人の役に立つことに誇りや喜びを持つようになる。同年齢の子どもに興味を示し、一緒に遊びたがる。かかわりを求める対象が保育者から同年齢の子どもへと移っていく。当然、いざこざが頻繁に起こる。そこで相手に怒りをぶついたり、反対に相手から拒否されて悲しい思いをすることで自分と相手の関係に気づき、自制心が育つのである。この期では、仲間との遊びを通して、他児とのか

かわり方、コミュニケーションの取り方を経験して身につけていくように指導していくことが中心になるといえよう。

4歳クラス期では、友達関係が拡大していくし、友達を求めて一緒に遊びたがる。他児の遊びなどを観察し、興味ある内容、やり方を模倣し自分の遊びに取り込むようになる。生活と遊びのルールの意味に気づき、自分たちで作りそれを守り従うようになる。自己を発揮し自立に向かう時期であるが、それは保育者に認められているという安定感に支えられているからこそであり、保育者のとのかかわり、信頼感の構築が前提となる。同時に同年齢の子ども、異年齢の子どもと一緒に遊ぶことで、人とかかわる態度、意欲、方略を習得するように指導していくことが中心になるといえよう。

5歳クラス期では、仲間意識が育ち、同一の目的に向かって活動し、集団活動では与えられた役割を自覚し責任を持って担い、自信をもって行動するようになる。好奇心が強く、周囲のいろいろな事象に興味を示し。積極的に取り組み、考えて判断したり理解したりするようになる。遊びや友達の好みがはっきりしてきて、仲間グループで遊ぶようになる。仲間との遊びが発展し、多様な物事の追究が可能になるように素材や道具などを用意するなど適宜環境を再構成したり、人間関係を調整したり広めたりして、人とかかわる態度、意欲、方略を習得するように指導していくことが中心になるといえよう。

文 献

- 荒井湧(編著) 2000a 新年齢別クラス運営：2 1～2歳児のクラス運営 ひかりのくに
荒井湧(編著) 2000b 新年齢別クラス運営：3 2～3歳児のクラス運営 ひかりのくに
神長美津子・待井和江・今井道子・日高佑(編著) 2000 新年齢別クラス運営：4 3歳児のクラス運営 ひかりのくに
神長美津子・田中敏隆・吉永八代子(編著) 2000 新年齢別クラス運営：6 5歳児のクラス運営 ひかりのくに
神長美津子・安澤智子・高村慶子・小山孝子(編著) 2000 新年齢別クラス運営：5 4歳児のクラス運営 ひかりのくに
川原佐公(編著) 2000 新年齢別クラス運営：1 0～1歳児のクラス運営 ひかりのくに
川原佐公(編著) 1997a 0・1・2歳児マニュアル ひかりのくに
川原佐公(編著) 1997b 3歳児マニュアル ひかりのくに
川原佐公(編著) 1998 4歳児マニュアル ひかりのくに
川原佐公(編著) 1999 5歳児マニュアル ひかりのくに

第3章

保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態

保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態

丸山良平*

(平成18年9月27日受付；平成18年11月6日受理)

要 旨

本研究の目的は保育園の0・1歳クラスにおける子ども相互の関わりの実態と、こうした子ども相互の関わりに対する保育者援助の実態を明らかにすることである。

対象者は新潟市の一保育園の0・1歳クラスに就園する幼児18人と、クラス担任保育士7人である。参与観察でデータを収集し、2005年10月から2006年3月迄の6ヵ月間、各月1,2回合計10回の観察を行った。このデータを分析して、子ども同士の関わりでは、会話を主とする行為より身体の動きを主とする行為がきわめて多いこと、さらに玩具などの物を奪う攻撃行動が多いこと、そして保育者援助は主に攻撃する関わりに対して行われることなどを示した。

KEY WORDS

Care and Education	保育援助	Interaction	相互交渉
Peer Relationship	仲間関係	Human Relations	人間関係

問題と目的

今日の日本では、子どもたちが家庭生活をおくる地域社会に、自然発生的な子ども集団が形成されにくくなっており、乳幼児が家庭の外で同年齢の子どもと初めてかかわるのは保育園、幼稚園など保育の場とあってよい程であろう。保育の場の役割は、人とかかわる機会を保障するという視点からも、ますます重要となっているといえよう。保育の場は子ども同士、子どもと保育者などの様々な人間関係が織りなす世界である。その中で子どもは必然的に他者と相互交渉を行い、仲間関係を育むことになる。

さて0歳クラス、1歳クラスに該当する子どもの人間関係に関して、保育所保育指針（厚生省児童家庭局,1999）が示している特徴をまとめると以下のようになる。0歳クラスの子どもは保育者の世話を受けながら、安心できる大人との信頼関係に基づく情緒の安定を基盤にして、探索活動を活発に行うようになり、身近な人や欲しいものに興味を示し、自分から接近していかこうとする。1歳クラスの子どもは、保育者との関係を基盤にして身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけ、さらに物を仲立ちとした他者との触れ合いや物の取り合いも激しくなるなど対人関係が深まる。指針の記述は0・1歳クラスの子ども間の関係は保育者との関わりを軸にして育つのであり、保育者の役割はきわめて重要と考えられていることを示している。

それでは保育者は子ども同士が直接、相互作用するのを促すような援助をしなければならな

* 幼児教育講座

いかというと、そうではないようである。幼稚園5歳クラス児の社会的スキルの学習に関する研究では、直接的に仲間との遊びや関わりを持たなくても、一人遊びを充実させ、遊びの場を共有することにより友だちとの関わり方を学べることを示し、仲間との関わりを持たず一人遊びをする幼児には、少なくとも同じ様な興味を持つ者同士を同じ場所で遊ばせるだけでも、社会的スキルの学習という観点からは有効としている(畠山・畠山・山崎, 2003)。これに従えば、無理に一緒に遊ぶように誘導する必要はなく、一人でいる子どもが他児の遊んでいる活動内容や行動の様子を観察したり、平行遊びを始めたりすることでも仲間関係が生まれるきっかけになるのである。そうであるならば一人遊びや平行遊びが多い0・1歳クラスでも保育者の援助によって効果的に仲間関係を育むことができるのであろう。

1・2歳児の子ども同士の相互の関わりとして、千羽(2000)は二者間の相互作用が多いこと、接近・接触・攻撃などの身体の動きを主とする行動が、呼びかけ・話しかけ・質問・自己主張などの言語を主とする行動よりも多いこと、親和的行動も多く出現しているが子どもによっては攻撃的行動を現すものもあると述べている。この見解は乳幼児を観察した直観としては同意できるものであるが、この裏付けとなるデータは示されていない。また荻野(1986)は、保育園の乳児クラスでは、玩具など物の所有権をめぐるけんかがよく起こり、物の所有の優先権についてのルールらしきものが存在すると述べている。そして2歳頃になると物の所有の成功は、優先権によって決まってくるという。そうであるならば、持っている玩具を取られそうになった幼児が、奪われないように反撃したり、逃げたりなどしてそれに対応することが推測される。

そこで本研究は、0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助を、観察データを分析した結果で示し、その実態を明らかにすることを目的とする。

方法

対象者と研究協力者 新潟市内私立保育園の0・1歳クラスの幼児18人とそのクラスを担当する保育者7人である。0歳クラス児に該当するのは5人で観察開始時の平均月齢は12.8ヵ月(レンジ9～18ヵ月)、1歳クラス児に該当するのは13人で同平均月齢は25.2ヵ月(レンジ19～30ヵ月)である。保育者は5人がクラス担任(保育歴はそれぞれ15年, 12年, 12年, 11年, 9年)と1人が補助保育者(保育歴4年)、1人は早朝延長保育補助(保育歴5年)である。研究協力者は担当保育者7人と園長、副園長である。

観察期間 2005年10月から2006年3月迄の6ヵ月間、毎月1, 2回、合計10回の観察を実施した。

観察方法 参与観察を行い、幼児に話しかけられれば応じ、保育者不在で幼児に困難が生じたとき(例えば、身体攻撃を繰り返し受けるなど)には手を貸した。登園後から昼食前までの約2.5～3時間、DVD撮影とメモ書きにより資料を収集した。すべての映像資料を文字化して、幼児たちの活動や保育者の援助が一段落したところで区切って事例としてまとめ考察した。各事例において幼児同士相互の一まとまりのやりとりを一エピソードとした。研究協力者との話し合いを通して意見交換したり、幼児の家庭状況や注目すべき出来事などの情報を提供してもらい、考察する際により確実に解釈ができるように留意した。

分析方法 エピソードは、観察日時、場所、関わりを始めた者と相手、関わった幼児数(関与

者数)、関わりを始めた者の行為の方法と内容、その行為をした原因(理由)、相手の行為の方法と内容、保育者援助の有無(内容)、援助の際における状況判断の適否、関わり終了時の関係の10事項に分けて記録、分析した。冬休みを境に前期(観察回数5回)と後期(観察回数5回)に分けて分析比較し、その変容を検討した。

行為は一連の身体の動き(以降、動作と呼ぶ)もしくは発話につき1カウントとし、「撫でる」行為を同じ相手に連続して繰り返したとしても1つの行為としてカウントした。しかし一度その動きをやめて、また撫で始めたときは新たな行為としてカウントした。

結果と考察

対象クラスの日課は、8:30~8:45に登園し、自発的な活動を中心とする時間を過ごし、9:20に片付け、排泄、おむつを交換する。9:30~9:45におやつを食べ、9:50から11:30の昼食準備開始までの時間は、日によって異なるが、保育者が提案する活動をしたり、乳幼児の自発的な活動をしたり、散歩に行ったりする。

10回の観察で事例としてまとめたのは168件、その中に含まれるエピソードは338件(そのうち1歳クラス児同士のもの264件、0歳クラス児と1歳クラス児とのエピソードが56件、0歳クラス児同士のもの18件)であった。保育者援助のあるエピソードは154件(そのうち1歳児クラス同士ものは113件、0歳クラス児と1歳クラス児とのエピソードが33件、0歳クラス児同士ものが8件)であった。

関わりを始めた幼児の行為を初発行為、その働きかけを受けた相手側幼児の行為を応答行為と呼ぶ。行為の方法は、動作を主とするものと発話を主とするものとの2つに区別した。

初発行為の内容は親和(好意、譲渡)、中立(無意図的、生活的)、攻撃(身体攻撃、挑発、奪取)に分ける。それぞれを方法で区別し6項目に分類する。1歳クラス児同士、0歳と1歳クラス児、0歳クラス児同士の関わりでの初発行為における方法と内容を分類し、その件数比率をFigure 1に示した。

応答行為の内容は初発行為と同様に親和、中立、攻撃の3項目、さらに保護(保育者の援助により保護され幼児本人が行為しない。攻撃行動から庇う、乗物から落下する幼児を抱きかかえるなど)と泣哭(泣く、悲鳴;コミュニケーションを図る発話とは区別する)を加えて、5つに分ける。なお親和、中立、攻撃は方法で区別するので8項目に分類する。1歳クラス児同士、0歳クラス児と1歳クラス児、0歳クラス児同士の関わりでの応答行為における方法と内容を分類し、その件数比率をFigure 2に示した。

相互の関わりにおける関与児数

エピソードを関与児数で分類し、その件数比率を求めた。観察期間全体で関与児数が2人の比率は1歳クラス児同士89.0%で、0歳クラス児と1歳クラス児では98.2%、0歳クラス児同士では100%である。この比率はいずれも前期と後期で差異はみられず、どの場合でも幼児同士の関わりは二者間の相互交渉がきわめて多いことが示された。

1歳クラス児同士では関与児数が5人以上のエピソードは5件あるが、これはすべて保育者が援助したものである。関与児数が3人と4人のエピソードは合わせて24件あるが、保育者が援助したものは5件だけある。外の19件は幼児たちだけで、気の合うものが集まって遊ん

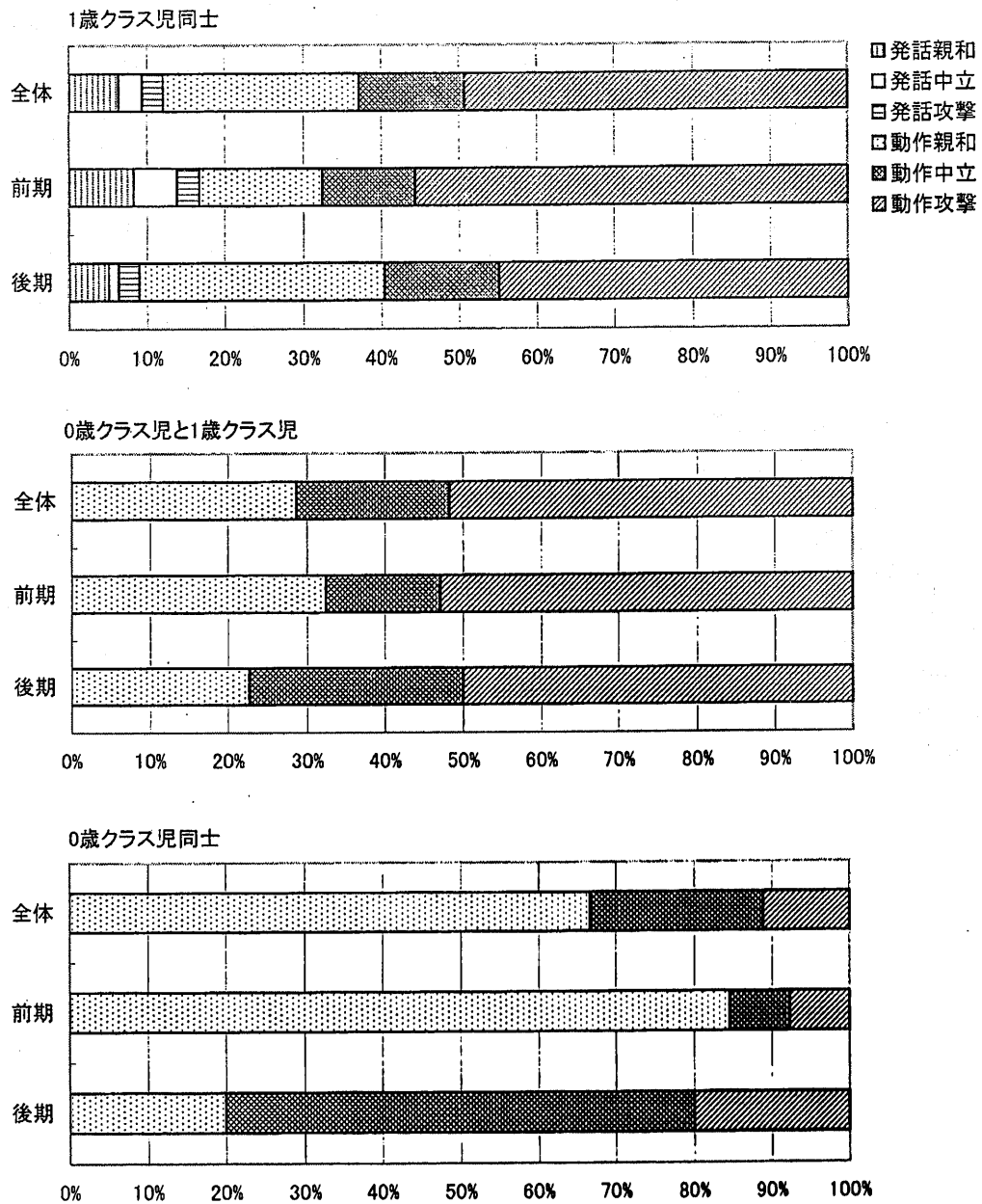


Figure 1 初発行為における方法と内容で分類した件数比率

たり、2人が一緒に1人から物を奪ったり、2人のいざこざに1人が参加して一方をかばい、他方に攻撃を加えるなどである。1歳クラスになると親和的場面、攻撃的場面のいずれでも3人、4人程度での相互の関わりを持てるようになることが示された。

初発行為における内容で分類した件数比率

ここでは初発行為の親和、中立、攻撃という内容に焦点化するので、Figure 1に示したエ

保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態

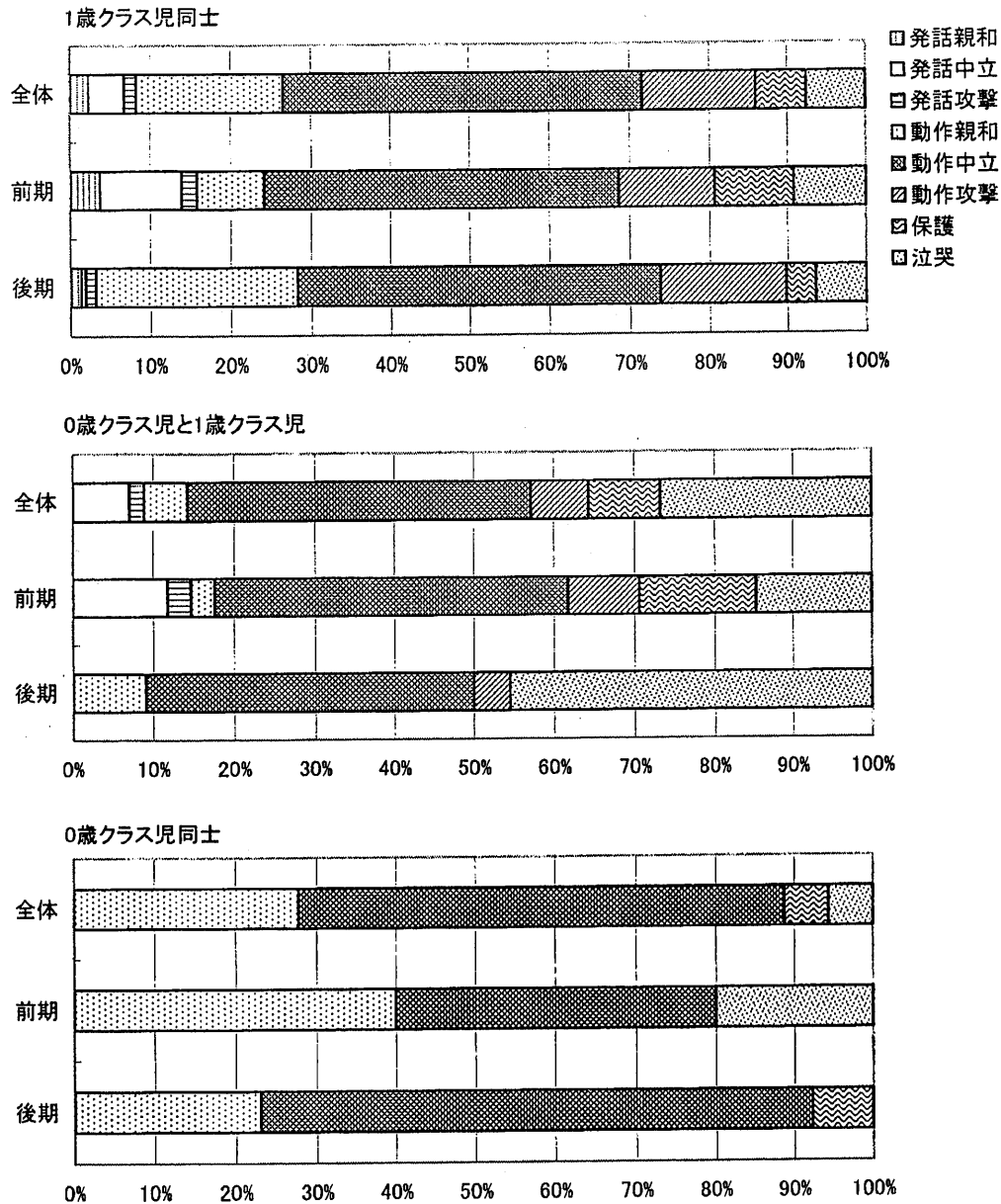


Figure 2 応答行為における方法と内容で分類した件数比率

ピソードの件数比率を、動作と発話という方法で区別せずに分析する。

1歳クラス児同士の関わりでは、攻撃が51.9%、親和が31.5%、中立が16.6%である。前期と後期で3項目の件数を検定したところ、その差は有意傾向であった ($\chi^2=4.70, df=2, 0.05 < p < 0.10$)。残差分析の結果、後期になると親和が多くなっていることが示された ($0.01 < p < 0.05$)。親和は後期になると10%以上増加するのに対して、中立、攻撃はやや減少する程度である。前期、後期を通して攻撃は約50%で一定して高く、前期に低かった親和が後期に急増するのである。

0歳クラス児と1歳クラス児との関わりでは、攻撃が51.8%、親和が28.6%、中立が19.6%である。前期と後期で差はない。また初発行為をするのも、攻撃するものほとんどが1歳クラス児であり、0歳クラス児が攻撃をしたのは3件である。

0歳クラス児同士の関わりでは、親和が66.7%、中立が22.2%、攻撃が11.1%である。親和は前期で1件だったが、後期では11件に増加し、攻撃は前期と後期で1件ずつである。この攻撃は相手の手を払い除ける、自分に接近しないように手を左右に振る程度のものである。

初発行為、応答行為における動作と発話で分類した件数比率

ここでは初発行為と応答行為の動作と発話に焦点化するので、Figure 1とFigure 2に示したエピソードの件数比率を、親和、中立、攻撃という内容で区別せずに分析する。

初発行為における動作を主とする関与の比率は、1歳クラス児同士では87.9%で、0歳クラス児と1歳クラス児とでは100%、0歳クラス児同士でも100%である。動作の比率が非常に高い。

応答行為における動作を主とする関与の比率は、1歳クラス児同士では77.7%で、0歳クラス児と1歳クラス児では55.4%、0歳クラス児同士では88.9%である。反対に発話を主とする応答行為の比率は、1歳クラス児同士で8.3%、0歳クラス児と1歳クラス児では8.9%、0歳クラス児同士では皆無である。どの場合でも前期と後期では違いがない。

初発行為では、動作を主とする関与がきわめて多いことが示された。しかしそれに比べると応答行為では動作を主とする関与はかなり低くなっている。それは攻撃行動で関わりが始まった場合、側にいた保育者が保護（攻撃行動等を除ける援助）したり、攻撃を受けた幼児が泣く、悲鳴をあげることをしたり、もしくは「来るな」「あっちへ行け」「嫌だ」「しないで」「○○ちゃんの一」と発話で攻撃、拒否、主張などを行っていることによる。

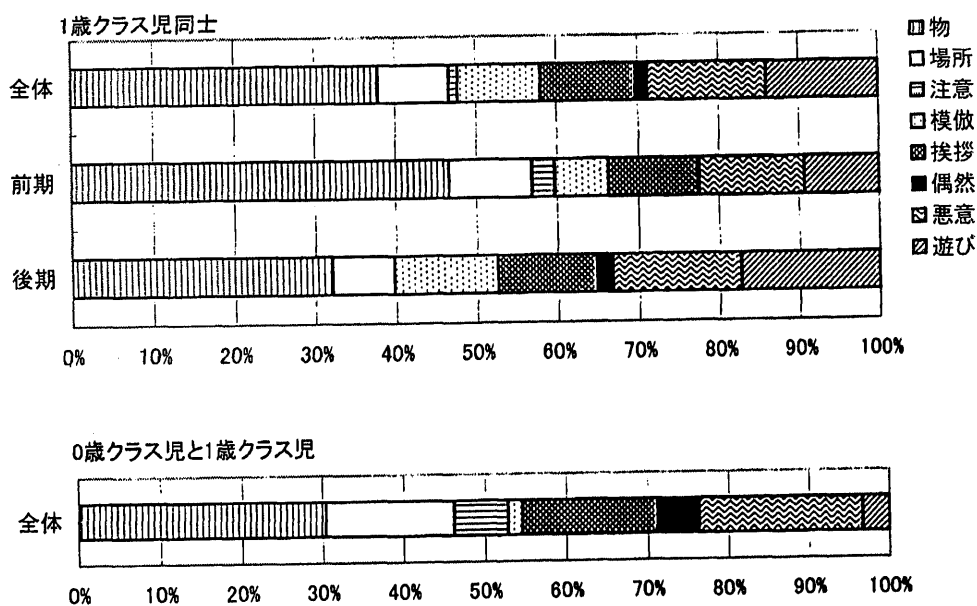


Figure 3 初発行為の原因

初発行為の原因

初発行為をした経緯から、その行為をした原因や理由を推測し、①物（物を奪う、与えるため）、②場所（場所を取る、譲るため）、③注意（注意や制止をするため）、④模倣（模倣や平行遊びをするため）、⑤挨拶（挨拶や愛撫をするため、共感や同情を表現するため）、⑥偶然（無意図的な関与で偶発的に生起してしまった）、⑦悪意（意図的に意地悪をするため）、⑧遊び（一緒に遊びをするため）、の8項目に分類する。各項目名の後の（ ）内に典型例を示した。

1歳クラス児同士、及び0歳クラス児と1歳クラス児との関わりのエピソードを初発行為の原因で分類した件数比率をそれぞれ Figure 3 に示した。ただし0歳クラス児と1歳クラス児は前期と後期で違いがないので全体のみを示した。

1歳クラス児同士の全体では、物が37.9%と最高率で、次いで悪意が14.7%、遊びが14.0%、挨拶が11.7%、模倣が10.2%、その外は10%未満である。件数が5未満となる項目（注意と偶然）を除いて、前期と後期で5項目の件数を検定したところ、その差に有意傾向があり（ $\chi^2=9.81, df=5, 0.05 < p < .10$ ）、残差分析の結果、後期になると物を原因とする関与は少なくなることが示された（ $.01 < p < .05$ ）。

この原因を初発行為の内容とクロスしてみると、攻撃では、物が原因となる行為の77.0%、場所が原因となる行為の73.9%、悪意が原因となる行為の94.9%が該当している。攻撃は物を奪い、場所を取り、意地悪をするために行うのである。親和では、遊びが原因となる行為の83.7%、挨拶が原因となる行為の74.1%が該当していた。他児の遊んでいる姿や悲しんでいる様子を見て、愛撫したり同情したり、さらに一緒に遊ぼうとして親和的行為をするのである。

0歳クラス児と1歳クラス児との関わりでは、前期と後期で比率に違いはなかった。全体では物が32.1%、悪意が21.4%、挨拶が17.6%、場所が10.7%、その外は10%未満である。この原因を初発行為とクロスしてみると、攻撃では、悪意が原因となる行為の91.7%、偶然が原因となる行為の100%が該当している。親和では挨拶が原因となる行為の全てが該当している。その一方、物が原因となる行為は親和で1/2、中立と攻撃で1/4程ずつみられた。これは1歳クラス児が0歳クラス児から物を取り上げるばかりではなく、それ以上に譲ってやることを示している。

0歳クラス児同士では、挨拶が61.1%、その外は10%未満である。挨拶が原因となる行為はすべて後期に出現し、そのすべてが親和に該当していた。0歳クラス同士では後期になると共感や同情を表現したり、相手を愛撫することが示された。

応答行為における内容

ここでは応答行為の親和、中立、攻撃、保護、泣哭という内容に焦点化するので、Figure 2 に示したエピソードの件数比率を、動作と発話という方法で区別せずに分析する。

1歳クラス児同士の関わりでは、中立が49.6%、親和が20.5%、攻撃が15.9%、泣哭が7.6%、保護が6.4%である。前期と後期で5項目の件数を検定すると有意差があり（ $\chi^2=12.39, df=4, .01 < p < .05$ ）、残差分析の結果、後期になると親和が多くなり、保護が少なくなる（どちらも $.01 < p < .05$ ）。親和は後期になると2倍以上に増加し、保護は1/3程に減少するのに対して、中立と泣哭が漸減傾向で、反対に攻撃が漸増傾向である。

この応答行為を初発行為とクロスしてみると、攻撃に対しての応答では、中立が52.5%で、攻撃は24.0%である。攻撃された場合、驚いて対応できずに呆然と相手を見る、攻撃を避けよ

うと逃げるなどの中立が過半数を占めるが、直ぐに反撃する場合は約1/4ある。保護と泣哭は攻撃に対する応答がほとんどである。親和に対しての応答では、親和が60.2%、中立が32.5%で、攻撃はわずかである。親和に対しては過半数が親和で対応しているが、中立の応答は、相手の意図が分からずに確認したり、戸惑う、もしくは相手の好意に添えないなどという状況である。初発行為の中立に対する応答では中立が72.7%、攻撃が13.6%である。幼児の多くが普通に対応するが、中には関与を誤解したり、もしくは関与に怒ったりし、攻撃で対応してしまう場合がある。

0歳クラス児と1歳クラス児との関わりでは、中立が50.0%、泣哭が26.7%、その外は10%未満である。この件数は前期と後期で有意な差はない。

この応答行為を初発行為とクロスしてみると、攻撃に対しての応答では、泣哭44.8%、中立27.6%、保護13.8%、攻撃10.3%、その外はわずかである。1歳クラス児から攻撃されれば0歳クラス児のほとんどは泣くか、逃げるか、呆然とするのである。攻撃で反撃した0歳クラス児の例では、先に奪われた物を力づくで奪い返したり、大声で言い返して抵抗するものであった。親和に対しての応答では、中立が87.5%で、その外はわずかである。これは相手の意図が分からずに戸惑う、もしくは相手の好意に添えないという状況である。初発行為の中立に対する応答では中立が54.5%、攻撃が18.2%である。関わりを攻撃と判断して反撃したり、関わってきたことが気に入らずに攻撃してしまうのである。

0歳クラス同士では、中立が61.3%、親和が27.8%でその外はわずかである。全く攻撃で応答することはない。初発行為の過半数は親和であるから、親和的行為に対してその意図が分からずに戸惑ったり、その行為に対応しないという状況なのである。

保育者援助の内容と援助の際における状況判断の適否

保育者援助の内容をその行動と発話から推測し、①説明（状況や他児の考えを言う、対象の幼児を認める）、②禁止（〇〇をしないでと言う、叱る）、③提案（〇〇をしたらいよいよという）、④質問（誰がしたの、何をしたいのと問う）、⑤遊び関与（活動に参加して一緒に遊ぶ、遊びをリードする）、⑥物提示（玩具を与える、玩具のある場所を示す）、⑦手制止（叩くのをやめさせる、奪った物を取り上げる）、⑧礼要求（ありがとうと言わせる）、⑨謝罪要求（ごめんねと言わせる）、の9項目に分類する。各項目名の後の（ ）内に典型例を示した。援助の際における状況判断の適否は、幼児の相互的関わりに介入する際に経緯を適切に判断していたかを適、不適で分ける。

幼児の相互的関わりにおいて保育者援助のあった比率は、1歳クラス児同士では42.8%、0歳クラス児と1歳クラス児では58.9%、0歳クラス児同士では44.4%で、この比率の差は有意ではない。保育者援助は幼児たちの関わりに関係して行われるので、前期、後期の比較は意味ない。件数の少ない0歳クラス同士を除いて、観察の全期間での1歳クラス児同士、及び0歳と1歳クラス児の関わりにおける援助内容の比率をFigure 4に示した。どちらの場合も禁止が最高で30%前後、ついで18%前後で手制止、説明と続く。比率の高い項目から保育者援助は、攻撃と関係して行われることが予想される。

そこで1歳クラス児同士の関わりにおける初発行為と保育者援助をクロスさせると、援助は攻撃の71.3%、中立の15.0%、親和の13.3%で行われている。保育者援助は主に攻撃の関わりに対して行われていることが示された。援助の内容をみると攻撃では、禁止と手制止の

保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態

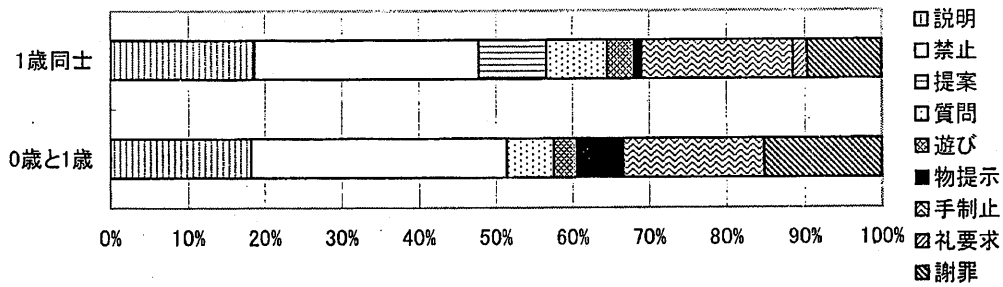


Figure 4 保育者援助の内容

90.9%, 提案の80.0%, 謝罪要求の72.7%が行われている。説明だけは親和, 中立, 攻撃においてほぼ同じように行われている。

0歳クラス児と1歳クラス児の関わりにおける初発行為と保育者援助をクロスさせると, 保育者援助は攻撃の57.6%, 親和の30.3%, 中立の12.1%で行われている。保育者援助は攻撃ばかりではなく親和でも行われている。この比率と1歳クラス児同士のそれとを検定すると, 差は有意傾向であった ($\chi^2=5.21, df=2, .05 < p < .10$)。残差分析の結果, 0歳クラス児と1歳クラス児の関わりの方が親和の比率が高かった ($.01 < p < .05$)。異年齢の関わりでは, 保育者は親和でも様子を見守り援助するのである。攻撃では手制止の83.3%が行われている。禁止は攻撃の54.5%, 親和の36.6%で行われている。1歳クラス児の0歳クラス児への親和的な行動もやらないように援助することが示された。

0歳クラス児同士の関わりにおける初発行為と保育者援助をクロスさせると, 保育者援助は親和で87.5%, 攻撃で12.5%が行われている。0歳クラス児同士では攻撃そのものが少なく, それに対する援助が少ないのである。

援助の際の状況判断で不適であった比率は1歳クラス児同士で約5%, そして0歳クラス児と1歳クラス児との関わりでも約5%で, 0歳クラス児同士では0%であった。保育者は援助の際に, 正確に状況を判断して対応していることが示された。

相互的関わりの終了時の関係

幼児の相互的関わりが終了した際に関係を, その経過と幼児の表情, 発話, 動作から推測して, 親和 (友好的な関係), 中立 (友好的でも敵対的でもなく, ふつうの関係), 敵対 (攻撃しよう, やり返そうとする対立的な関係) の3項目に分ける。1歳クラス児同士, 0歳クラス児と1歳クラス児, 及び0歳クラス児同士の関わりにおいて, 関与終了時の関係でエピソードを分類した件数比率を Figure 5 に示した。

1歳クラス児同士では, 3つの件数の比率はそれぞれ1/3前後で, ほぼ等しい。0歳クラス児と1歳クラス児の関わりでは, 中立が約5割, ついで敵対が約3割, 親和は約2割である。0歳クラス児同士では, 親和がちょうど5割, 中立が約4割, 敵対が約1割である。0歳クラス児同士では親和で終了するケースが多くなっているが, それは初発行為で攻撃が少ないことによる。

そこで終了時の関係と初発行為, および保育者援助の有無でクロスして分析してみる。

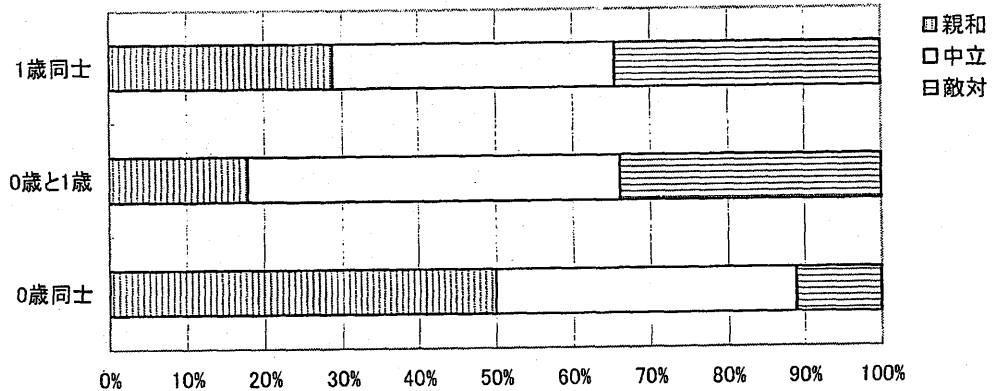


Figure 5 関与終了時の関係で分類した件数比率

1歳クラス児同士において、初発行為の親和、中立、攻撃の3項目と終了時の親和、中立、敵対の3項目をクロスさせて件数を検定すると高い有意差があった($\chi^2=146.64, df=4, p<.01$)。残差分析の結果、初発行為が親和であると、終了時に親和が多く、中立と敵対が少なくなり、初発行為が中立であると、終了時に中立が多く、敵対が少なくなる。さらに初発行為が攻撃であると、終了時に敵対が多く、親和が少なくなる。すなわち、初発行為でできた関係のまま終了するケースが多いのである。

次に保育者援助の有無と終了時の親和、中立、敵対の3項目をクロスさせて検定すると、有意差があった($\chi^2=12.19, df=2, p<.01$)。残差分析の結果、援助がないと終了時では親和が多くて、敵対が少なくなる。反対に援助があると終了時で親和が少なく、敵対が多くなる。保育者援助のあった方が終了時で敵対が多いという結果である。そこで初発行為が親和と中立において、保育者援助の有無と終了時の親和、中立、敵対の3項目をクロスさせて検定したところ有意差はなかった。さらに初発行為が攻撃においても同様に検定しても有意差はない。1歳クラス児同士の場合、保育者援助は初発行為が攻撃の場合に行われることが多いために、保育者援助があると終了時に敵対が多くなるように見える結果となっただけなのである。

0歳クラス児と1歳クラス児、0歳クラス児同士の関わりでは件数が少なく統計的分析はできなかった。

全体的考察

0・1歳クラス児の人間関係の実態

1歳クラス児同士、及び0歳クラス児と1歳クラス児の関わりでは、期間を通して二者で関係を持つケースが圧倒的多数であったし、0歳クラス児同士では二者の関与しかなかった。それでも1歳クラス児同士の場合、冬休み以降になると保育者援助がなくても、幼児たちだけで3、4人の気の合うものが集まって一緒に遊ぶようになるし、2人がいざこざを起こすとその経緯をみていた幼児が「良い方」と判断した幼児に味方して、相手を攻撃することがあった。1歳クラス児は、親和的場面、攻撃的場面のいずれでも3、4人で相互の関わりを持つようになるのである。

1歳クラス児同士の関わりでは、攻撃は観察期間を通して最も多いが、冬休み以降になると、親和的関与が増加していた。それに対する応答でも親和的関与が増加していた。幼児たちは相互に相手の性格、遊びの傾向などの理解を進めて、気の合うものと一緒に遊ぼうという態度になっていくのであろう。その一方で、親和的な関わりをされても、その意図が分からずに戸惑うケースも多いことが分かった。動作だけでは、相手の真意を理解し難いのである。攻撃に対しては、それを上手く避けたり、驚いて呆然としたりするケースは多いが、反撃する幼児がいる。攻撃されると、自分を守ったり、自分の欲求を通すために積極的に反撃をするのである。攻撃を仕掛ける側の幼児は、こうした反撃される経験を積んで、攻撃を思いとどまり、相手が受け入れやすい別のやり方を選択するようになるのであろう。

0歳クラス児同士の関わりでは、親和的関与が多かった。この年齢では強く自己主張をすることが少なく、目の前の相手に興味があり撫でたり、体を触ったりする関与が多くなるのである。0歳クラス児は1歳クラス児から攻撃的な関与を受けることが多いが、1歳クラス児と共に生活し関わる中で、攻撃の仕方と攻撃をされたときの対処の仕方を学んでいくのであろう。

幼児が自分から関わり始める際も、相手の関与に対して応答する際にも、動作を主とする行為が多かった。1歳クラス児の多くにとって、自分の要求や自分の意図を言葉で表現するのがまだ難しいからであろう。

幼児が関わりを始める原因は、物に関することが最多で、その多くは玩具を奪うためであった。さらに、玩具の取り合いで機嫌が悪くなった幼児が、相手に意地悪するために行為することも多かった。それでも冬休み以降になると、物を奪ういざごはかなり減少する。相手の物を奪ってはならない、奪う行為にでるとけんかになるし、保育者に注意されし、結局自分が嫌な思いをすることを経験を通して理解し、自制するようになるのであろう。0歳クラス児と1歳クラス児の関わりでも、物に関することが最多だが、攻撃的関与よりも親和的関与の方が多い。1歳クラス児が0歳クラス児から物を奪うよりも与えることを多くするのである。1歳クラス児は0歳クラス児に優しく、親切に関わる場合もある。0歳クラス児同士では冬休み以降になると、相手に共感したり、同情して愛撫する行為が増える。相手の存在を意識し、興味を持って関わろうとするようになるのである。

相互的関わりが終了したときの幼児たちの関係は、関わりが始まったときと同じ関係で終わるケースが最多であった。攻撃で始まれば、敵対のまま終わるのである。また保育者援助が有っても、無くても、終了時の関係に違いはなかった。攻撃的な一連のやりとりの中で幼児だけでは、関係を修復できないし、さらに保育者援助は、関係を修復するような働きかけまでにはなっていないといえよう。

保育者援助の実態

保育者援助は1歳クラス児同士では主に相手を攻撃する関わりに対して行われることが示された。そのために攻撃的な行為を禁止したり、被攻撃児を保護するために攻撃行動を手で制止したりする援助が多いのである。0歳クラス児と1歳クラス児、及び0歳クラス児同士の関わりでは、保育者は親和的関与でも援助していた。それは1歳クラス児や0歳クラス児が、0歳クラス児を愛撫しようとしても、その動作のコントロールが上手くできずに強く押したり、撫でるつもりでも結果的に叩くことになったり、手の指が目に入ったり、髪の毛を引っ張ったりする可能性が高いと予測しているからであろう。

保育者が援助する際に、そのほとんどのケースにおいて関わりの経緯を適切に状況判断していたことが示された。保育者は幼児たちの行動をよくみており、必要に応じて援助しているのである。

さて保育者援助は主に攻撃的関与に対して行われていたが、それで十分なのであろうか。特に冬休み以降、幼児たちは気の合う者と一緒になって遊ぶようになる。その際に保育者がその遊びに参加して、遊びを内側から支えるような援助をすることで、遊びをおもしろく展開させ、幼児が仲間と十分に関わる機会を作ればより深い、より広い仲間関係を育てることもできるであろう。また攻撃で始まった関与は、保育者援助があっても敵対のまま、終了するケースが多かったが、なぜなのであろうか。これらの考察を進めるには、親和と攻撃で始まる関与における保育者援助の在り方の質的な分析が必要と考えている。今回、本研究の量的な分析では、援助における保育者の説明の具体的な内容の分析、指導の方向などの検討はできなかった。今後は事例を分析して、援助の質的な検討を進めたい。

引用文献

- 千羽喜代子 2000 0・1・2歳児保育：実践と研究，保育学研究,30,1,88-97.
畠山美穂・畠山寛・山崎晃 2003 仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか？：日常の保育場面での遊びや保育者との関わりを通して，保育学研究,41,1,20-28.
厚生省児童家庭局 1999 保育所保育指針（平成11年改訂）
荻野美佐子 1986 低年齢児集団保育における子ども間関係の形成，無藤隆・内田伸子・齊藤こずゑ（編著）子ども時代を豊かに：新しい保育心理学（pp.18-58）学文社

付記

研究にご協力をいただきました保育園の先生方，園児のみなさんに心より感謝いたします。
なお，本研究は，平成17・18年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（2），課題番号17530470の援助を受けてなされた研究の一部である。

0-1-Year-Old Class Children's Peer Relationship and Support of Children's Nurses in a Nursery School

Ryohei MARUYAMA *

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify the features of 0-1-year-old class children's peer relationships and the support provided by children's nurses in a nursery school.

Our participants were 18 young children and 7 children's nurses in a nursery school in Niigata City. We observed their actions and utterances through participative observation approximately twice every month for six months from October 2005 to March 2006, and observed them ten times in total.

We analyzed this data and elucidated that in the children's relations, an extremely large amount of actions resulted from the utterances, and a lot of aggressive actions to deprive their peers of things such as toys were observed. In the children's nurses' support, they had been mainly caring in response to the children's aggressive relations.

* Division of Early Childhood Education